

信濃歴史談

太田鶴雄編纂

全

特31

170

024925-000-2

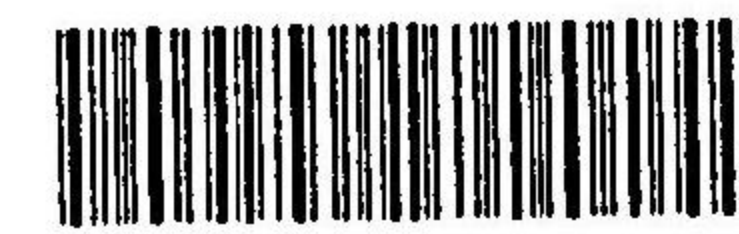
特31-170

信濃歴史談

太田 鶴雄 / 編

M27

ADC-2219



正木直太郎序
太田鶴雄編纂

信濃歷史談

信陽

水琴堂藏版

特31
170

信濃歷史談引

信濃非無國史、而紀事概紛雜、讀者不能得其要領、至能包括事跡、節目分明、前後詳備者、未之有也、予嘗慨焉、我友太田得堂、好古今史、乘尤明信濃史、頃者編信濃歷史談、郵寄一本、曰、瑣々小冊、固非示大方、聊欲使童蒙知信濃史概要耳、請辨一言、余受而閱之、上白

信濃歷史談引

信濃非無國史而紀事概紛雜讀者不能得
 其要領至能包括事跡節目分明前後詳備
 者未之有也予嘗慨焉我友太田得堂好古
 今史乘尤明信濃史頃者編信濃歷史談郵
 寄一本曰瑣々小冊固非示大方聊欲使童
 蒙知信濃史概要耳請辨一言余受而閱之
 上自



神代下至明治之隆世、治亂興亡之跡、忠臣
義士孝子節婦之事、凡可以資黃小訓戒者、
該括無遺、其文質而不俚、簡而悉矣、不獨使
童蒙得我信史乘要領、而於涵養兒童德性、
啓發道心、其所裨補、蓋不爲鮮少矣、洵先獲
我心者也、因不辭而辨、詹言於卷端云、

明治甲午四月

正木直太郎識

凡例

一 余信濃史ヲ撰ハント欲スルヤ茲ニ數年正史野乘記傳紀行古記
錄等嘗讀ミシ所ノ者ニ就テ苟史料タルベキモノハ必摘記シ積
テ數卷ヲ成スニ至レリ名ツケテ「みすゞ郷談」ト云フ然レモ年代
ニ干ラス事實モ亦錯雜ニシテ他日編史ノ參考ニ供ヘント欲ス
ルニ過ギス余頃者郷談及其他諸書ヲ參考シテ此編ヲ撰ベリ編
中記スル所一モ余ノ憶測ヲ加ヘス必出所アリ年代事實等諸書
不同ナル者ハ余ノ判斷ニ依リ最信ス可キ者ヲ採用ス
一 此編ハ少年ヲシテ史ヲ學ビ德ヲ進ムルノ一助タラシメント欲
スルガ故ニ治亂興亡ノ大要ヲ表スヲ專トセズ忠孝仁義ノ道ニ

補アルノ事蹟ヲ載セリ然レモ亦三四ニ過ギズ
 一古城趾古戰場名所舊蹟等本文ニ記セサル者ハ卷末ノ圖ニ之ヲ
 補ヒタリト雖悉載セズ讀者幸ニ恕セヨ
 一此編僅ニ期月ノ間ニ成リ校正未精カラズ事實モ亦或ハ誤謬
 ラン讀者幸ニ指摘ヲ賜ラバ幸甚

明治甲午春三月

編者識

信濃歴史談目錄

- 一 信濃國
- 一 國名及境域
- 一 戸隠神社及諏訪神社
- 一 東夷征伐
- 一 木曾ノ古道及延喜ノ古道
- 一 善光寺及國分寺
- 一 梓弓及望月ノ駒
- 一 古代ノ沿革
- 一 天慶ノ亂
- 一 平維茂
- 一 源義仲
- 一 仁科氏
- 一 滋野ノ三姓
- 一 諏訪氏
- 一 村上氏
- 一 小笠原氏
- 一 湯舟澤
- 一 村上義光父子ノ忠死

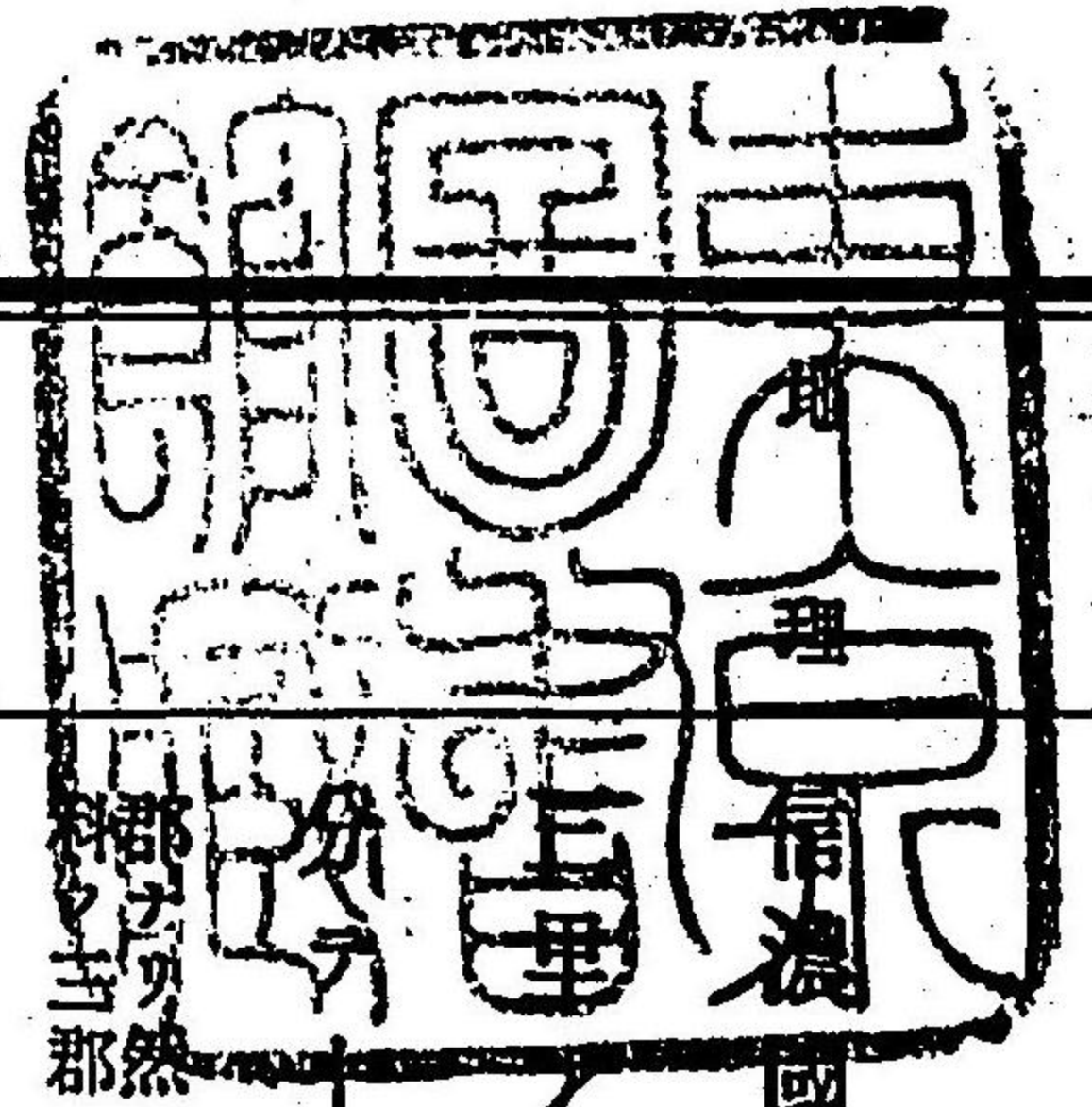
- 一 信濃宮及尹良親王
- 一 武田氏
- 一 宇佐美定行ノ忠死
- 一 織田氏
- 一 眞田信幸ノ孝悌
- 一 徳川氏
- 一 太宰純
- 一 佐久間象山
- 一 王政維新ヨリ今日ニ至ル
- 一 足利成氏
- 一 武田信玄約ヲ重ニス
- 一 上杉謙信ノ義氣
- 一 豊臣氏
- 一 眞田幸村父子ノ忠死
- 一 徳川時代ノ天災
- 一 阿藤
- 一 武田耕雲齋
- 一 結論

信濃歴史談目錄終

信濃歴史談

信濃國

信濃上田 太田鶴雄編



信濃國ハ、東山道中ノ一大國ニシテ、東西四十三里、南北五十
 リテ、其境域、十州(東、上野、武藏、甲斐、駿河、遠江、參河、西、美濃、飛騨、北、越中、越後)ニ接ス、之ヲ
 分テ、十六郡(南北佐久、小縣、上下高井、五郡ハ國ノ東部ニシテ、西筑摩、南北安曇ノ三郡ハ
 國ノ西部ニアリ、北部ハ上下水内ノ二郡ニシテ、南部ハ諏訪及上下伊那ノ三郡ハ
 國ノ中部ニ位ス)トナシ、長野縣ノ管轄ニ屬ス、地勢高クシ
 テ、山岳國ノ四境ヲ圍ミ、國內モ亦、山脈四方ニ連リ、大河其間
 ニ發ス、南方ノ土地ハ、氣候稍溫暖ナリト雖、北方ハ、頗寒冷ニ
 シテ、積雪三四月ニ至ル、然レモ、地味概肥沃ニシテ、農桑ニ適

スルカ故ニ耕種養蠶ノ業極メテ盛ナリ、

國名及境域

國名
 國名ヲ「志」ノ「下」稱フルハ、國內ニ「科」ノ木多ク、其皮白クシテ美ナルヨリ、上古、諏訪明神之レニテ衣服ヲ作り給ヒシカバ、國人之ニ傲ヒケルヨリ、國名ヲ「志」ノ「國」ト云フニ至レリト、又信濃ハ、山國ニシテ階阪多キヨリ、ツヒニ「志」ノ「國」ト稱フルニ至レリト、未何レカ是ナルヲ知ラス、

文字
 往古ヨリ、科野、級野、又ハ信濃ト書キシモ、文字ハ、共ニ、後世定メタルモノニシテ、今ハ、專信濃ノ二字ヲ用ユ、

境域
 元明帝ノ和銅六年、始メテ國郡ノ名ヲ定メ給フ時、信濃ヲ割

和銅六年
 三紀元一三七
 承應元年
 二紀元一三一
 萬治元年
 八紀元一三一
 享保九年
 四紀元一三八
 養老五年
 一紀元一三八
 天平三年
 一紀元一三九

テ、美濃ノ國ヲ置レシカ、其境界久シク定マラス、承應ノ頃ニ至ルマテ、木曾ヲ以テ、美濃ノ一部トナシタリ、又萬治ノ頃ヨリハ、伊那郡ノ一部トナセリ、明ニ筑摩郡ト定マリシハ、徳川氏ノ時、享保九年以來ナリ、元正帝ノ養老五年ニ至リ、又信濃ヲ割テ、諏訪ノ國ヲ置レシカ、聖武帝ノ天平三年ニ至リ、諏訪ノ國ハ、廢サレテ、再信濃ニ併セラレタリ、今ノ諏訪郡ハ、面積甚タ狹シト雖、往昔ノ諏訪國ハ、佐久、小縣、筑摩、伊那ノ諸郡ニ跨リ、面積廣カリシナランモ、其境域、今日ニ在リテハ、確ニ知ルヲ能ハス

戸隱神社及諏訪神社

戸隠神社

天照大神ノ天岩戸ニ隠レ給フヤ、諸神、樂テ岩戸ノ前ニ奏シ給フ、大神、少ク岩戸ヲ開テ、窺ヒ給ヒシカバ、戸ノ側ニ立チ給ヒシ、手力雄命、大神ノ御手ヲ引テ出シ奉ル、戸隠神社ハ、即チ此手力雄命ヲ祭リタル者ニシテ、國幣小社ナリ、或ハ云フ、命、岩戸ヲ空ニ抛ツ、岩戸此所ニ落ツ、因テ戸隠ノ名アリト云フ、天照大神、天孫瓊々杵尊ニ宣ハク、豐葦原瑞穗國ハ、我子孫ノ世々王タルベキ地ナリ、汝往テ之ヲ治メヨ、寶祚ノ隆ナルコト、正ニ天壤ト窮リナカルベシトテ、三種ノ神器ヲ授ケ給フ、初、大神、使シテ、大己貴命ニ告ケシメ給フニ、汝宜シク、葦原中國ヲ舉テ、天孫ニ奉セヨ、朕モ亦、汝ノ子孫ナシテ、永

諏訪神社

ク福ヲ保タシメント、命、命ヲ奉ス、天孫、乃チ、日向國高千穗峯ニ降り給フ、大己貴命ノ第二子、健甕名方命之ヲ拒テ、天孫ニ背キ給ヒシカ、遂ニ中國ヲ舉テ、天孫ニ奉シ、諏訪ノ地ニ退キ給フ、是レ即諏訪明神ニシテ、今ノ國幣中社ナリ、

東夷征伐

日本武尊

神武帝、海内ヲ平定シテ、天位ニ即キ給ヒシモ、西ニ熊襲アリ、東ニ蝦夷アリテ、未、王化ニウルホハズ、屢亂ヲナス、景行帝、皇子日本武尊ヲシテ、往テ東夷ヲ伐タシメ給フ、尊英武ニシテ、賊ヲ平ラケ、歸途、碓氷峠ニ上リ、遙ニ、東南ヲ望ミ、橘姫ヲ慕フテ、吾孀者耶ト嘆キ給ヒシカバ、後世、東國ヲ「アヅマ」ト稱フ

ルニ至レリ、尊、國內ヲ綏服シ、神御坂(下伊那郡ノ西南、美濃ノ境ニアリ)ヲ越テ、美濃ニ出テ給フ、

田村將軍

光仁帝ノ朝、東夷、一タビ叛キシヨリ、屢亂ヲナシ、良民ヲ害フ、依テ大軍ヲ發シテ、之ヲ征スルモ、未全ク平定スルヲ能ハズ、桓武帝、延暦二十年、坂上田村麿ヲ征夷大將軍トナシ、東夷ヲ討タシメ給フ、將軍、東山道ヲ經テ、諏訪ニ至リ、神馬ヲ社ニ獻シテ、神助ヲ祈ル、傳ヘ云フ、當時、中房山(安曇郡有明村)ニ賊アリ、神社佛閣ヲ壞リ、民舍ヲ燒キ、良民ヲ害フ、其名ヲ魏石鬼ト云フ、將軍、擊テ之ヲ殲シ、民害ヲ除クト、傳説確ナラズト雖、暫記シテ以テ、他日ノ考證ヲ待ツ、

延暦二十年
一紀元二四六年

木曾ノ古道及延喜ノ古道

木曾ノ古道

文武帝、大寶二年、始メテ木曾ノ山道ヲ開ク、即木曾ノ古道ニシテ、藪原ヨリ奈川ニ入り、島々(南安曇郡安曇村)ヲ經テ、國府(松本)ニ通シタルモノニシテ、天文年中ニ至リ、木曾義存之ヲ改修シテ、今ノ道トナセリ

大寶二年
二紀元三三六年

木曾ノ機道

木曾ハ、山間ノ溪谷ニシテ、高山、木曾川ノ兩岸ニ峙チ、機道ヲ作リテ、僅ニ道路ヲ開キシカハ、其危險ナルヲ云フ可カラズ、古ノ機道ハ、伊奈川ノ上流ニアリタレド、今ハ、福嶋ト上松ノ間ニ、小橋アリテ、只名ノミ遺レリ
出る嶺入る山のはの近ければ

木曾路は月のかげぞみじかき 鴨長明

雲も猶下にたちけりかけはしの

はるかに高き木曾の山路 源頼真

かけはしや命をからむつたかつら 芭蕉翁

道ひろき御代にこそあれあやうさも

むかし語りの木曾のかけはし 香川黄中

神、御坂ハ、道路險阻ニシテ、往來艱難ナリトテ、元明帝和銅

六年、木曾路ヲ開キ給ヒシモ、醍醐帝ノ頃ニ至ルマテ、驛路

ハ、猶伊那郡ヨリ、諏訪筑摩、小縣、佐久ノ四郡ヲ經テ、碓氷峠ニ

出ヅルマテ、十五ノ宿驛アリタリ、所謂延喜ノ驛傳是ナリ、

延喜ノ古

道
和元六年
三月一三七

和歌の名

延喜ノ古道ハ、往古ヨリ、開ケタル國道ナリシカバ、美濃ヨリ

神、御坂ヲ越エテ、伊那ニ出ヅルノ間、古歌ニ出デタル、名稱多

シ、藪原、箒木、伏屋、木賊等即是ナリ

はよきゞの心をしらやその原の

道にあやなく迷ひぬる哉 (源氏物語)

その原や伏屋に生ふるはよきゞの

ありとを覚えてあはぬ君かな 坂上是則

とくさかるその原山の木の間より

みかゝれ出るあきの夜の月 仲正

善光寺及國分寺

佛教傳來

欽明帝十三年百濟國ヨリ、佛像及經論ヲ獻ス、大臣蘇我稻目深ク之ヲ信ズ、帝依テ稻目ニ賜フ、稻目己レノ家ヲ捨テ、寺トナシ、佛像ヲ安置ス、此年、諸國大ニ疫ス、大連物部尾輿等奏テ曰、是佛ヲ信ズルニ依ルナリト、佛像ヲ灘波ノ堀江ニ投ズ、

善光寺

推古帝十年伊那郡ノ人、本多善光、佛像ヲ灘波ノ堀江ニ得テ、郷ニ歸リ、寺ヲ麻積里宇沼村ニ建テ、之ヲ安置セシカ、皇極帝ノ朝ニ至リ、水内郡芋井里長野村ニ遷シ、善光ノ名ヲ取テ善光寺ト云フ、今ノ善光寺即是ナリ、我國寺院多シト雖、其名ノ著ハル、モノ、善光寺ニ及ブモノナク、遠近ノ若若男女來

國分寺

天平九年
和元二
三九
七年

テ參拜スルモノ、年ニ萬ヲ以テ、數フベシ
聖武帝天平九年、天下諸國ニ詔シテ、國ゴトニ金光明寺ヲ造ラシメ、國家鎮護ノ寺トシ、一國ノ僧侶ヲ司ラシメ給フ、上田ノ東一里ニ國分寺アリ、即是ナリ、古ヨリ、毎年正月八日ヨリ十四日ニ至ルマテ、寢勝經ヲ讀ム、今猶一月八日ニハ、遠近ノ信徒、參拜スルモノ多ク、之ヲ八日堂ト云フ、古ノ遺風ナリ、堂宇、屢火災ニカ、リシト雖、三重ノ古塔、今猶存セリ、國內最古キ建築物ナリト云フ、

梓弓及望月ノ駒

古代ニ在リテ、最要用ナル武器ハ、弓ニシテ、信濃ノ梓弓ニテ造

梓弓

大寶二年
紀元二二六

リタルヲ初ナリト云フ、其後、檀槻柘等ヲ用非テ造リタルモ、其頃ハ、只木ノマヽニテ弓トナセリ、文武帝、大寶二年、梓弓ヲ貢獻セシ以來、屢之ヲ貢獻シ、醍醐帝ノ朝、祈年ノ祭料ニ定メ給フ、

望月ノ駒

文武帝ノ四年、諸國ヲシテ、牧地ヲ定メテ、牛馬ヲ放タシメ給ヒシヨリ、牧畜ノ業、漸ク開ケ、信濃ハ、牧馬ノ最盛ナル國トナレリ、今ノ御牧原ノ邊、頗良馬ヲ産セリ、古ハ、毎年八月二十九日ヲ以テ、信濃ヨリ、馬ヲ貢獻スルノ日ト、定ラレシガ、清和帝、貞觀七年ヨリ、八月十五日ニ改メ給フ、是ヨリ、牧ニ望月ノ名アリ、醍醐帝ノ朝、貢馬ノ地ヲ定メ給フ、信濃ヲ十六ヶ

貞觀七年
紀元一五三

所トス、

逢坂の關の清水に影見えて

けふや引くらんもち月の駒

紀貫之

古代ノ沿革

神武帝、海内ヲ平定シ、土着ノ豪族ヲ封シテ、國造トナシ給ヒケレハ、歴代ノ、皇帝、相踵テ、烈祖ノ遺略ニ倣ハセ給ヒ、土豪ヲ封シテ、國造トナシ、以テ其土地ヲ治メシメ給フ、信濃ハ、乃、崇神帝ノ朝、初メテ國造ノ封セラレタル國ニシテ、降テ、孝德帝ノ朝ニ至リ、封建ノ制ヲ改メテ、郡縣ノ制トナシ給ヒ、文武帝ノ朝、大寶令ヲ定メテ、大ニ郡縣ノ制ヲ改良シ、國

國造

上國

ナ分テ、大上中小ノ四種トナシ、國毎ニ國守ヲ置キ、一國ノ政
治ヲ司ラシメ給フヤ、信濃ハ、上國ト定メ給フ、松本ノ東南筑
摩ノ地ハ、國守ノ廳ノアリシ所ニシテ、是、松本ニ、信府又ハ國
府ノ稱アル所以ナリ、

國守ノ任ハ、四年、或ハ、五年ヲ以テ期トナシ、常ニ交替セシモ、
藤原氏權ヲ專ニスルニ及テ、朝綱大ニ弛ミ、國守命ヲ奉セス、
往々任國ニ留リテ、京ニ歸ラス、其後、次第ニ封建ノ勢トナレ
リ、國內豪族ノ祖先ハ、多クハ古ノ國守ニ出テタリ、

天慶ノ亂

承平中、平將門下總ノ猿嶋ニ據リ、亂ヲナシ、常陸ノ大掾國香

國分寺ノ

承平元年
一紀元一五九

天慶三年
〇紀元一六〇

維茂鬼女
紅葉ヲ退
治ス
天延元年
三紀元一六三

ナ殺ス、國香ノ子貞盛、父ノ仇ヲ復サント欲シ、官ヲ棄テ、東
國ニ走り、叔父良兼トトモニ、將門ヲ攻ム、利アラズ、貞盛思ヘ
ラク、敕ヲ受ケズシテ戰フハ、私闘ナリト、將ニ京ニ歸ラント
ス、將門、百餘騎ヲ率テ、急ニ貞盛ヲ追ヒ、承平八年二月、大ニ國
分寺ニ戰ヒ、堂宇兵燹ニカ、ル、貞盛、僅ニ遁レテ、京ニ歸ル、天
慶三年、貞盛、藤原秀郷トトモニ、將門ヲ討テ、之ヲ殺ス、

平維茂

平貞盛ノ從子ナ、維茂ト云フ、鎮守府將軍ニ任セラル、世ニ余
五將軍ト稱ス、天延ノ頃、信濃守ニ任セラル、今戶隱山中ニ維
茂、柳維茂、射拔穴等ノ、古跡アリ、昔、妖賊紅葉荒倉山ノ岩窟ニ

義仲木曾ニ生長ス

住シ、屢良民ヲ害フ、維茂擊テ之ヲ殲スト、只傳フル所ヲ記ス、

源義仲

源賴朝ノ長兄ヲ義平ト云フ、叔父義賢ヲ殺シ、又畠山重能ニ命シテ、其子義仲ヲ殺サント欲ス、重能之ヲ殺スニ忍ヒスシテ、齋藤實盛ニ託ス、實盛更ニ之ヲ、木曾ノ人、中原兼遠ニ託ス、故ヲ以テ、義仲木曾ニ生長シ、木曾氏ト稱ス、

義仲兵ヲ擧ク山吹城ニ據ル
治承四年
○紀元一八四

治承四年、源賴政、以仁王ヲ奉シテ、兵ヲ起シ、平氏ヲ滅サンコトヲ謀リ、令旨ヲ、諸源ニ傳フ、既ニシテ、事泄レ、賴政、宇治(近江)ニ敗死シ、王モ亦薨ジ給ヒシガ、令旨一タビ下リテヨリ、源賴朝先、兵ヲ伊豆ニ擧ク、義仲モ亦、木曾ニ起リ、甲斐下野ノ諸源ヲ

城長茂ヲ破ル
壽永元年
○紀元一八四

旭將軍木曾義仲像



招ク、信濃ノ豪族仁科海野、小室等、悉義仲ニ屬ス、義仲遂ニ山吹城(西筑摩郡宮ノ原)ニ據ル

壽永元年、越後國守城長茂、四萬騎ヲ率テ來テ義仲ヲ攻ム、義仲時ニ依田城(小縣郡)ニ在リ、乃三千ノ兵ヲ率テ、横田河原(更級郡丹波島ノ邊)ニ出テ、大ニ之ヲ破ル、長茂、創ヲ被テ遁ル、北陸ノ豪傑之ヲ聞テ、悉義仲ニ附ク

源賴朝兵ヲ
信濃ニ出

壽永二年
三紀元一八四

源賴朝固ヨリ義仲ト不和ナリ、壽永二年三月ニ至リ、親ヲ十
萬騎ニ將トシテ、信濃ニ入り、依田城ヲ圍ム、義仲兵ヲ引テ、之
ヲ越後ニ避ク、賴朝モ亦、戰ハズシテ還ル、

義仲北陸
ニ戰フ

壽永二年四月、平宗盛、其族維盛、通盛、忠度等ヲシテ、兵十萬ヲ
率テ、義仲ヲ北陸ニ討タシム、義仲五萬人ニ將トシテ、越後
ヲ發シ、平氏ノ軍ト、礪波山(越中)ニ戰ヒ、之ヲ破リ、進テ、遂ニ
叡山ニ陣ス、宗盛大ニ恐レ、舉族西海ニ奔ル、義仲乃京ニ入ル、
世呼テ旭將軍ト云フ、

義仲戰死

義仲、功ヲ恃ミテ、漸ク暴横ヲ極ム、後白河法皇、意ヲ賴朝ニ
屬シ、屢使ヲシテ、之ヲ召シ給フ、賴朝乃、二弟範賴、義經ヲシテ、

元曆元年
四紀元一八四

大兵ニ將トシテ、西上セシム、義仲之ヲ宇治勢多ニ拒キ、利ア
ラズ、遂ニ粟津(近江)ニ死ス、時ニ元曆元年ナリ、

仁科氏

仁科氏、其先姓詳ナラズ、或ハ謂フ、皇極帝ニ出ツト、或ハ謂
フ、醍醐帝ノ皇子、若宮親王ニ出ツト、其後數世、屢姓ヲ代フ
ルト、雖、皆其地ノ名ニ因テ、仁科氏ト稱シ、森城(北安曇郡)ニ居リ、安
曇郡ヲ領ス、壽永元曆ノ頃、仁科盛宗ト云フ者、木曾義仲ニ屬
シテ功アリ、義仲亡フルニ及ンテ、二子義重、鬼無里(上水内郡)ニ匿
レ、後仁科氏ヲ繼ク、六世ノ後、平盛忠、仁科氏ヲ繼ク、實ニ元和
二年ナリ、

元和二年
六紀元二二七

滋野ノ三姓

海野氏
彌津氏
望月氏

滋野善淵王ハ、清和帝第四ノ皇子、貞保親王ノ孫ナリ、姓滋野ヲ賜フ、善淵王ノ三世、重道、三子アリ、長子廣道、海野(小縣郡)ニ居リ、次子道直、彌津(小縣郡)ニ居リ、三子重直、望月(佐久郡)ニ居リ、各其所ヲ以テ氏トス、之ヲ滋野ノ三姓ト云フ、小縣、佐久、及筑摩等ノ諸郡ニ分レ、各豪族タリ、壽永元曆ノ頃、一族木曾義仲ニ屬シ、海野幸廣最功アリ、

諏訪氏

諏訪氏ハ、清和帝六代ノ皇孫、源經基ノ第五子、滿快ニ出ツ、子孫數家ニ分レ、各居ル所ヲ以テ氏トシ、家名最多シ、木曾義仲、

初メテ兵ヲ舉ゲシ時、依田信實ト云フ者、一族ヲ率井テ之ニ屬シ、屢戦功アリ、其四世盛重、諏訪郡ヲ領シ、依テ諏訪氏ト稱ス、

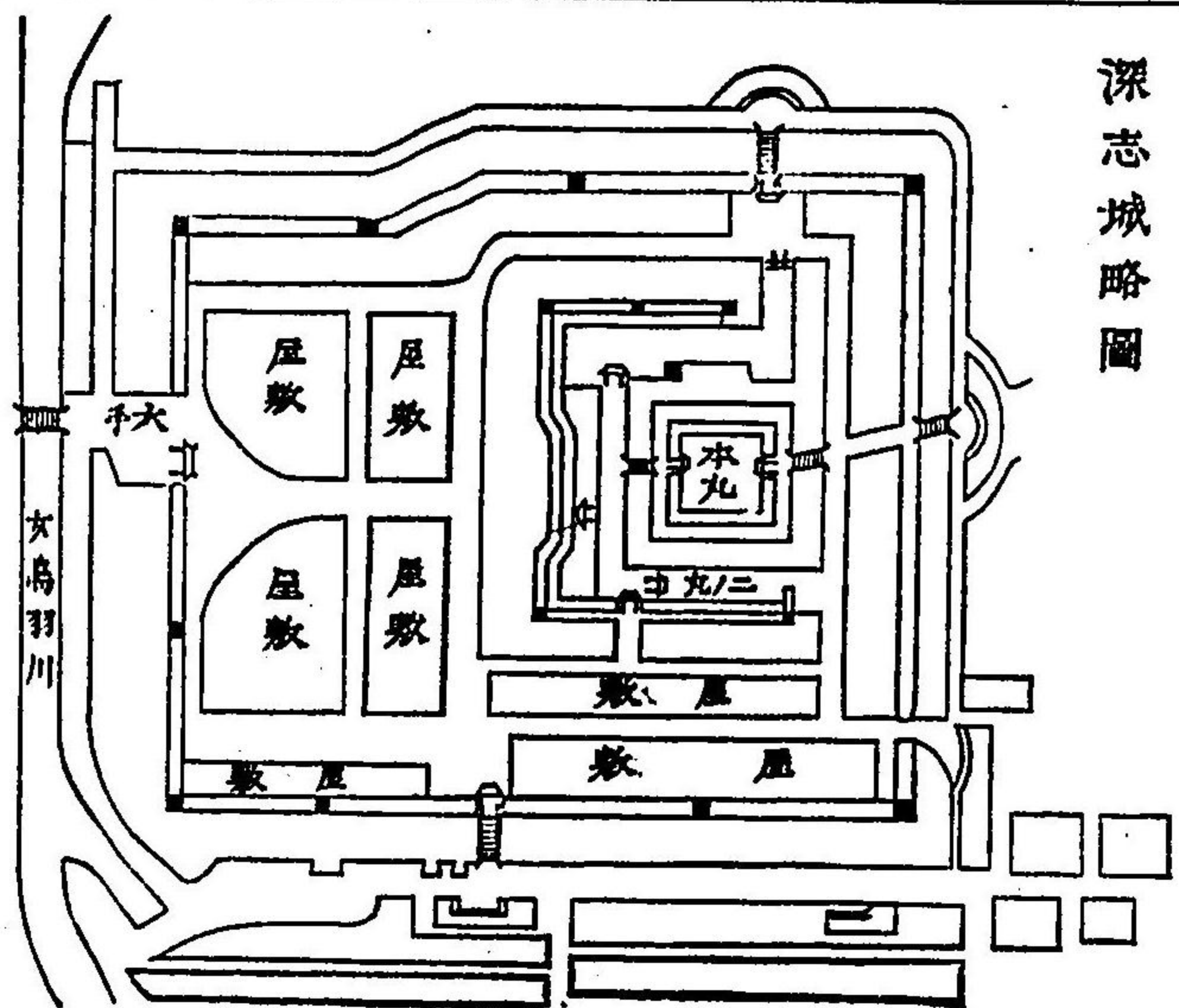
村上氏

村上氏ハ、清和帝ノ後裔、源賴信ニ出ヅ、賴信ノ曾孫、惟清、信濃ニ來リ、葛尾(埴科郡坂木村)ニ居ル、其子宗清、始メテ村上氏ト稱ス、數世ヲ經テ、義清ニ至ルマテ、威權漸ク加ハリ、水内、高井、埴科、更級、小縣、佐久、六郡ノ豪族、多ク其旗下ニ屬ス、

小笠原氏

新羅三郎源義光ノ子孫、世々甲斐ニ居ル、之ヲ甲斐源氏ト云

深志城略圖



フ、武田氏ノ祖ナリ、武田清光ノ三男ヲ遠光ト云フ、源頼朝府ヲ鎌倉ニ開クニ及ビテ、信濃守ニ任セラル、實ニ文治元年ナリ、遠光ノ三男ヲ長清ト云フ、初メテ小笠原氏ト稱ス、世々松尾(伊那郡)ニ居ル、長清十二子アリ、各國內ヲ分領ス、貞宗(貞和年中)ニ至リ、井川ノ館(東筑摩郡)ニ移リ、清宗(長祿年中)ニ至リ、林ノ

深志
永正元年
四
二
一
六

館(東筑摩郡)ニ移リ、貞朝ニ至リ、遂ニ深志城(松本)ニ移ル、深志城ハ、永正年中、其族、島立右近ノ築ク所ナリ、

湯舟澤

吉田兼好ハ、京都ノ人ナリ、幼ニシテ穎悟、好ミテ老莊ノ書ヲ讀ム、文才アリテ、和歌ヲ善シ、兼テ書ニ工ナリ、嘗テ後宇多帝ニ仕ヘ、帝崩シテ、髮ヲ剔リ、修學院ニ入ル、後諸國ヲ周遊シ、信濃ニ來リ、木曾ノ山水ヲ愛シ、霧ヶ原(西筑摩郡神城村)ノ麓、湯舟澤ニ、廬ヲ結ビテ居レリ、一日、國守、衆ヲ率テ、此地ニ獵ス、兼好、其喧擾ヲ厭ヒ、和歌ヲ詠シテ去レリ、後正平五年卒ス、

村上義光父子ノ忠死

正平五年
一
〇

元弘二年
二年

元弘二年、北條氏 後醍醐帝ヲ隱岐ニ徙ス、皇子護良親王、南都ニ逃レ給フ、從者僅ニ九人、途ニ芋瀬氏守ル所ノ關アリ、依テ芋瀬氏ヲ諭シテ、關ヲ出ントス、芋瀬氏親王ノ錦旗ヲ得ンコトヲ請フ、乃與ヘテ關ヲ出ヅ、時ニ埴科郡ノ人、村上義光、後レテ至リ、芋瀬ノ家僕、錦旗ヲ弄フヲ見、怒テ之ヲ奪ヒ、關ヲ破テ吉野ニ至リ、親王ニ隨フ、北條氏ノ將、二階堂貞藤、吉野ヲ攻ムルコト急ナリ、官兵支フル能ハズ、親王殆、危ク見エ給ヒケレバ、義光僞テ親王ト稱シ、終ニ戰死シ、子義隆親王ノ後拒ナナセシカバ、親王、纒ニ間ヲ得テ、高野ニ逃レ給フ、然レモ、義隆モ亦、創ヲ被テ自殺ス、時ニ年十八千歳ノ下、傳ヘテ美談トス

信濃宮及尹良親王

信濃宮

元弘三年、宗良親王、征夷大將軍ニ補セラル、親王ハ、後醍醐帝、第三ノ皇子ニシテ、大河原(伊那郡)ニ居給フ、依テ信濃宮ト申ス、正平七年、新田義治、足利基氏ヲ破テ、鎌倉ニ據ル、義治ノ兄、義宗、碓氷嶺ニ據レリ、此時ニ當リ、小笠原貞宗、特賊將、足利尊氏ニ屬セシモ、國內ノ豪族、多ク官軍ニ屬シ、信濃宮ヲ奉シテ、義宗ヲ援ク、尊氏大軍ヲ率井、來リ戰フ、官軍利アラズ、義宗越後ニ走り、宮ハ諏訪ニ退キ、後遠江ニ行キ給フ、

碓氷嶺戰

元和二年
六年

元和二年、義宗ノ子貞方、義治ノ子、義隆、共ニ浪合(下伊那郡)ニ匿レ、密ニ宗族ヲ集メ、國內ノ諸豪族ト、共ニ興復ヲ計ル、然レモ、足

伊良親王
應永四年
七紀元二〇五

島崎城

利氏ノ爲ニ攻メラレ、事ナラズシテ戰死ス、
 伊良親王ハ、宗良親王ノ王子ナリ、應永四年、新田氏ノ族、世良
 田、桃井等、伊良親王ヲ奉シテ、寺尾城(上野國世良田、政義ノ居城)ニ據ル、十九年、
 賊將上杉憲定、來テ寺尾ヲ攻ム、城遂ニ陥リ、世良田、桃井等、親
 王ニ供奉シテ、信濃ニ遁ル、千野賴憲、親王ヲ島崎城ニ奉ズ、國
 人小笠原、千久、滋野等、來リ屬ス、高嶋城趾ニ一廓アリ、島崎曲
 輪ト云フ、島崎城ノ古蹟ナリ、三十一年、親王諸士ヲ率テ、三
 河ニ赴カントテ、混合ヲ過ギ給フ、草賊襲ヒ來リ、世良田、桃井
 等、皆戰死シ、宮口亦爲ニ薨ジ給フ、今混合ニ、親王ノ墓アリ、
 足利成氏

安養寺

永享十一年
九紀元二〇九

文安二年
五紀元二二〇

永享十一年、鎌倉ノ執事、上杉憲實、將軍義教ノ命ヲ以テ、管領
 足利持氏ヲ殺サントス、持氏自殺ス、季子永壽王、遁レテ信濃
 ニ來リ、大井(北佐久郡、岩村田)ノ城主、大井持光ニ依ル、持光之ヲ安養寺
(北佐久郡、安原村)ニ隱ス、文安二年、王再鎌倉ニ歸リ、管領トナル、足利成
 氏はナリ、世ニ古河ノ公方ト稱ス、

武田氏

平賀氏亡
天文五年
六紀元二一九

天文五年十一月、武田信虎、兵ヲ信濃ニ出シ、海口城ヲ圍ム、城
 主平賀源心ヨク戰フ、信虎之ヲ攻メ、月ヲ踰ユルモ、援ク能ハ
 ズ、大雪ニ會シ、軍ヲ班ス、長子晴信、性沈毅ニシテ、權略多シ、自
 ラ請フテ、殿シ、其夜俄ニ海口ヲ襲ヒ、源心ヲ斬ル、時ニ十六才

平賀氏ノ系

ノ初陣ナリ、平賀氏ハ、源義光ノ裔ナリ、保元ノ亂、平賀義信、源義朝ニ屬シテ功アリ、世々平賀(佐久郡)ニ居ル、平賀(號龍岡城)ハ、即源心ノ城趾ニシテ、内山(佐久郡)ノ城趾ハ、平賀氏ノ本城ナリ、保元以來ノ舊家、コヽニ至テ亡フ

信玄自立ス

信虎、二子信繁ヲ愛シ、晴信ヲ逐ハント欲シ、駿河ニ至リ、今川義元ニ計ル、義元晴信ヲ助ケテ、其國ヲ擅ニセント欲シ、信虎ヲ留メテ返サズ、晴信、因テ甲斐ニ自立ス、後髮ヲ削リテ、信玄ト號ス、

諏訪氏小笠原氏兵ヲ甲斐ニ出ス

七年、諏訪城主諏訪頼茂、深志城主小笠原長時、甲斐ノ國變ヲ聞キ、其隙ニ乘シテ、武田氏ヲ亡サント欲シ、兵一萬ヲ合セ、信

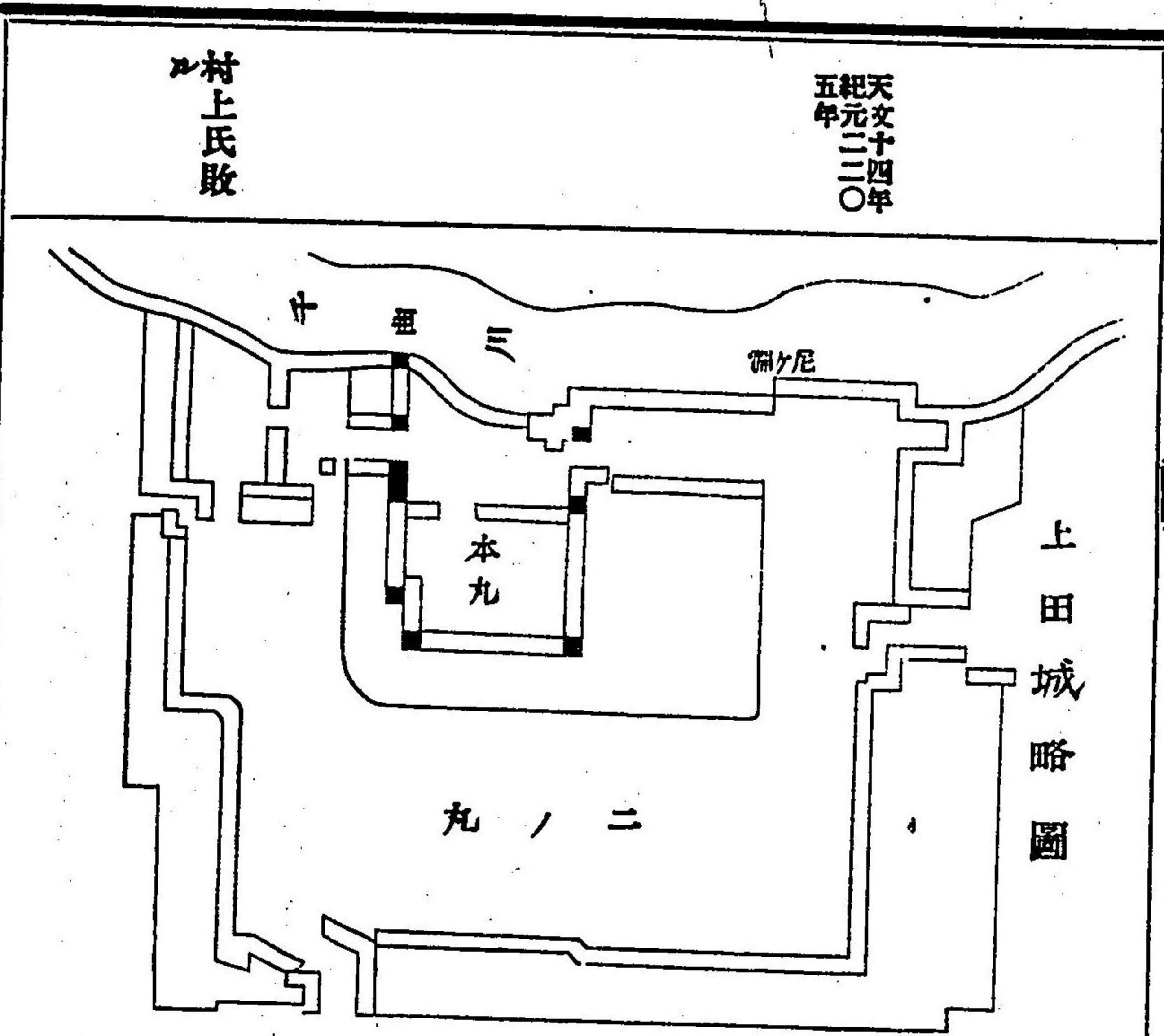
天文十三年
元三年
四年
諏訪氏敗ル
海野氏

玄ヲ攻ム、利アラズ、十一年、頼茂、長時、村上義清、木曾義昌ト共ニ、信濃ノ兵ヲ舉ゲ、又武田氏ヲ攻ム、利アラズ、是ヨリ連年兵ヲ出スト、雖、戰フ毎ニ常ニ敗レテ志ヲ得ズ、義昌ハ義仲ノ裔ナリ、義仲亡フト雖、三子義宗、木曾ニ居リ、世々木曾ヲ領ス、十三年、信玄、諏訪頼茂ヲ誘殺シ、諏訪郡ヲ領ス、海野氏、數世上田ニ居リ、村上氏ト境ヲ争ヒ、屢兵ヲ交ユ、天文七年、海野幸義、村上氏ト戰ヒ、敗死スルニ及ンテ、幸隆退テ眞田ニ住ス、因テ初メテ眞田氏ト稱ス、村上義清、佐久、小縣ヲ領スルニ及ンデ、去テ上野箕輪ニ居ル、信玄ノ義清ト相争フヤ、佐久、小縣ノ豪族、或ハ亡、或ハ降り、滋野ノ一族、亦信玄ニ屬ス、

信濃國史記
水學堂藏

天文十四年
五月二〇日

村上氏敗



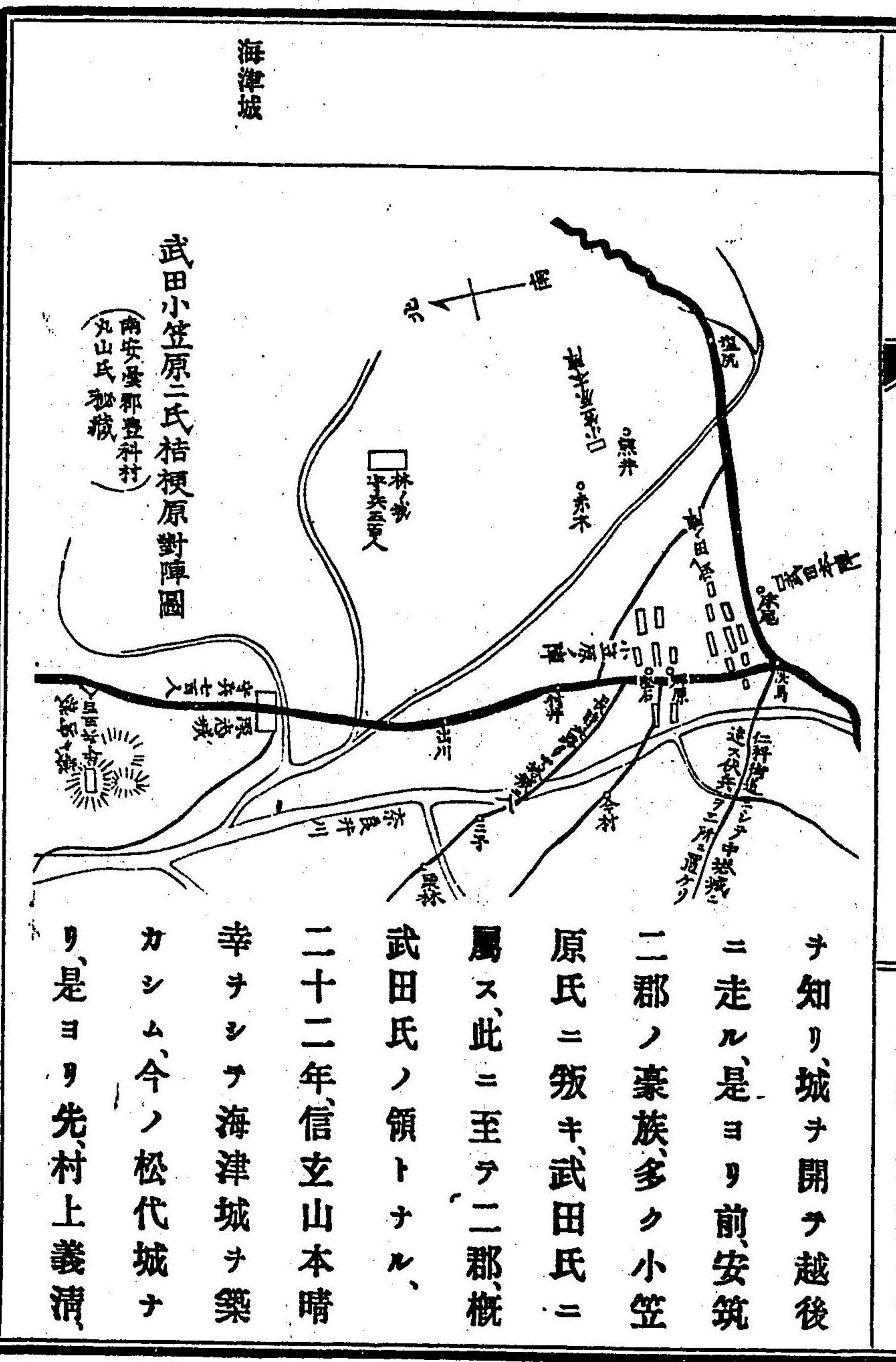
上田城略圖

信玄乃幸隆ヲ招キ舊地ヲ與ヘ、岩尾城(佐久郡)ヲ守ラシム、實ニ天文十四年ナリ、十五年、信玄戸石城(小縣郡)ヲ攻ム、村上義清來リ援ク、信玄、山本晴幸ノ計ヲ用井、義清ヲ破ル、十六年八月、義清軍ヲ上田原ニ出シ、信玄ヲ防キ、大ニ上田原ニ戰フ、信玄又之ヲ破リ、田原ニ戰フ、信玄又之ヲ破リ、義清ヲ逐ヒ、連リニ村上氏ノ

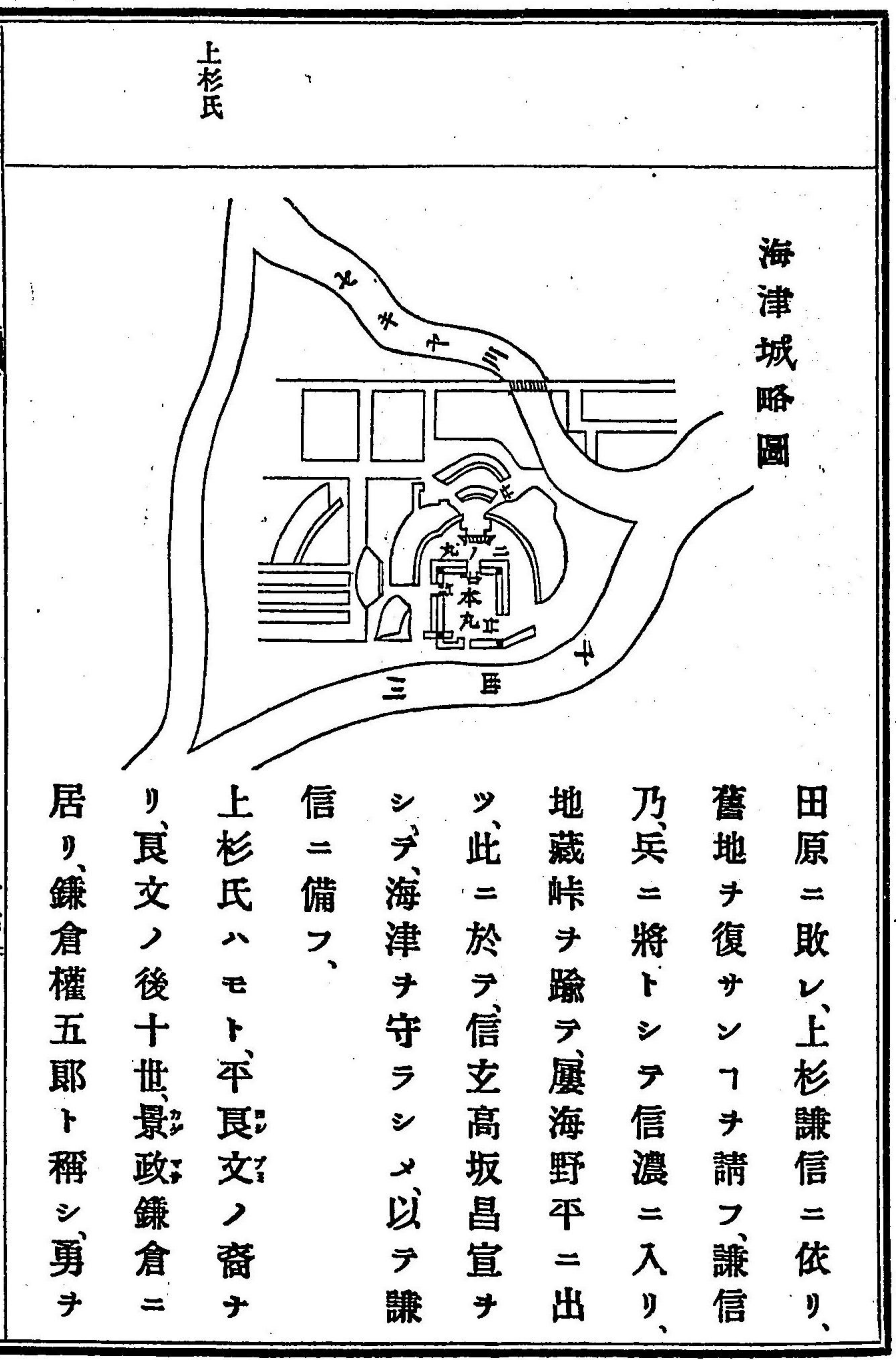
屬將、高梨(下高井郡中野町)須田(上高井郡須坂町)ヲ攻メ、二十二年ニ至リ、盞河中島四郡ヲ略ス、

高遠陷ル
十六年、信玄、伊那郡ニ入り、高遠城ヲ陷ル、是ヨリ先、小笠原長清ノ、信濃ニ守タルヤ、三子長綏、伊那郡ヲ領シ、高遠城ニ居ル、其後、城主屢代リ、此ニ至リテ、武田氏ノ領トナル、信玄乃其將秋山晴近ヲ置キテ、郡代トス、然レモ、郡内ノ諸豪族、各一方ニ割據シテ、未全ク降ラズ、

小笠原氏敗ル
二十二年五月、信玄、小笠原長時ト、桔梗原ニ戰ヒ、大ニ長時ヲ敗ル、長時自殺セントス、長臣二木豊後、之ヲ諫メ、共ニ中塔城(南安曇郡梓村)ニ入ル、信玄進テ、中塔ヲ圍ム、長時其支フ可カラザル



ナ知り、城ヲ開テ越後ニ走ル、是ヨリ前、安筑二郡ノ豪族、多ク小笠原氏ニ叛キ、武田氏ニ屬ス、此ニ至テ二郡、概武田氏ノ領トナル、二十二年、信玄山本晴幸ヲシテ海津城ヲ築カシム、今ノ松代城ナリ、是ヨリ先、村上義清



田原ニ敗レ、上杉謙信ニ依リ、舊地ヲ復サントシテ請フ、謙信乃、兵ニ將トシテ信濃ニ入り、地藏峠ヲ踰テ、屢海野平ニ出ツ、此ニ於テ、信玄高坂昌宣ヲシテ、海津ヲ守ラシメ、以テ謙信ニ備フ、上杉氏ハモト、平良文ノ裔ナリ、良文ノ後十世、景政、鎌倉ニ居リ、鎌倉權五郎ト稱シ、勇ナ

川中島第一戰

以テ著ハル、數世ヲ經テ、爲景ニ至ル、爲景ノ四子景虎精悍ニシテ膽略アリ、ヨク兵ヲ用フ、髮ヲ削テ、謙信ト號ス、二十二年十月、謙信八千騎ニ將トシテ、信濃ニ入り、十二月進テ河、中嶋ニ陣ス、信玄歩騎二萬ニ將トシ、出テ謙信ヲ防ギ、大ニ雨宮渡(川千曲)ニ戰フ、

川中島第二戰

二十三年八月、謙信又兵ヲ河、中嶋ニ出ス、曰ク、此行必信玄ト雌雄ヲ決セント、進テ犀川ヲ渡リ、大ニ御幣川ニ戰フ、兩軍激戰、呼聲天地ヲ動カス、忽一騎アリ、黃襖驪馬、白布面ヲ裹ミ、大刀ヲ拔キ、來リ呼テ曰、信玄イヅクニ在ルト、信玄馬ヲ躍ラシ、河ニ入り、將ニ逃レントス、騎モ亦河ニ入り、刀ヲ擧テ信玄ヲ

木曾氏降ル弘治元年五起元二二一

伊那ヲ領ス

研ル、信玄刀ヲ拔、ニ暇アラズ、持ツトコロノ麾扇ヲ以テ之ヲ扞ク、扇折ル、又撃テ其肩ヲ研ル、甲斐將士之ヲ救ヒ、纔ニ免ルルヲ得タリ、武田信繁、信玄ノ危ヲ聞キ、騎ヲ呼テ、戰ヲモトメ、遂ニ戰死ス、此日兩軍死傷頗多ク、夜ニ入り、各兵ヲ收メテ退ク、後ニ至リ、前ノ騎ハ、即謙信ナルヲ知レリ、信繁ノ墓、今松操山典厩寺(夏級郡水澤郡)ニ在リ、

弘治元年、信玄木曾氏ヲ攻ム、木曾義昌支フ可カラザルヲ知リ、和ヲ請フ、信玄之ヲ許シ、女ヲ以テ義昌ニ嫁シ、且千村、山村ノ二氏ヲ附ケ、老臣トス、是ヨリ木曾氏、信玄ニ屬ス、二年、信玄兵ヲ伊那郡ニ出ス、阿島ノ知久氏、村尾ノ小笠原氏

川中島第三戰
川中島第四戰

仁科氏
永祿四年
一統元三三三二

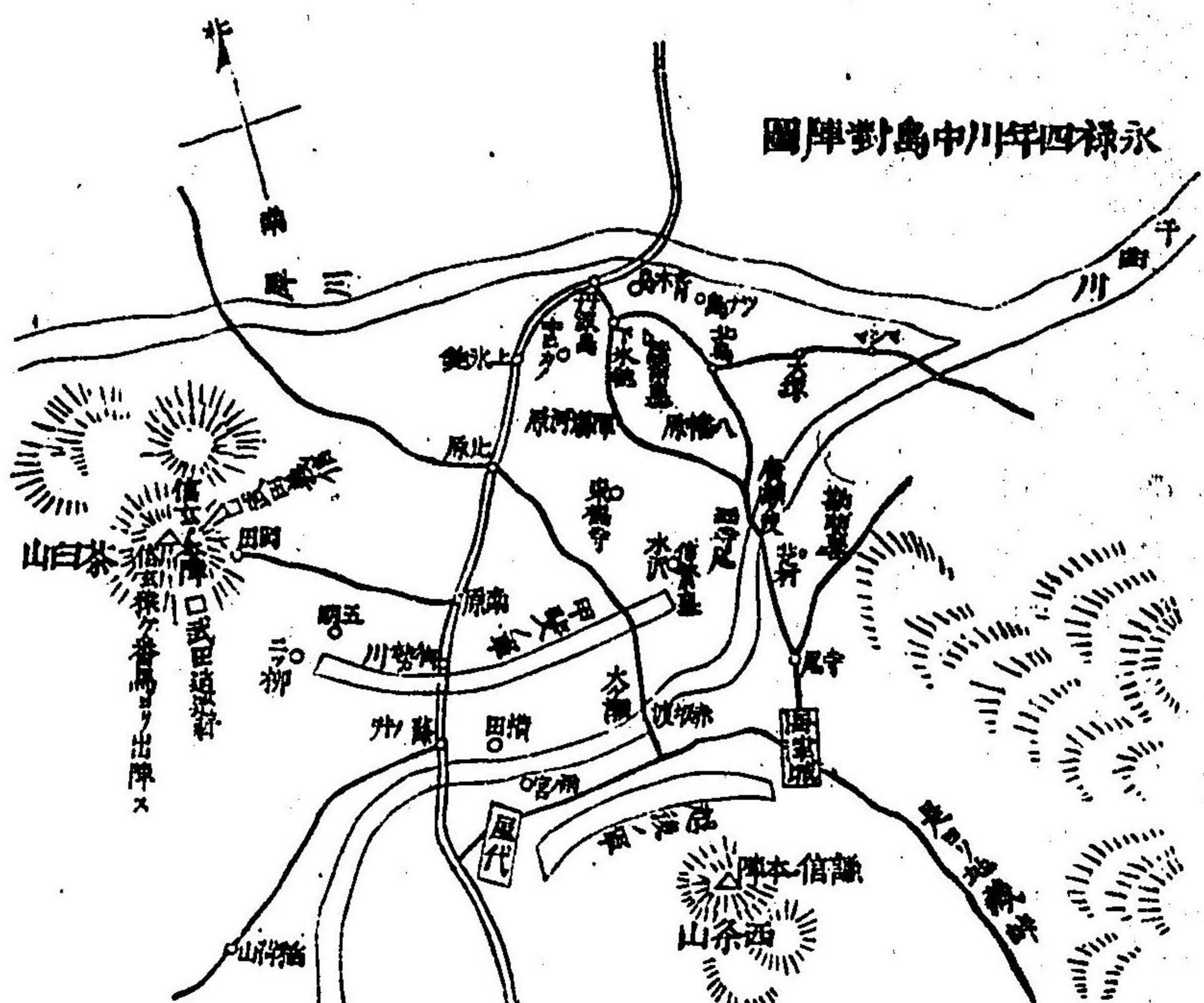
山吹ノ座光寺氏等、前後相降り、松島、伊奈部等ノ諸族、皆亡ビ、伊那郡、全ク武田氏ノ領トナル、信玄乃馬場、信房ヲシテ、高遠城ヲ改築セシム、山本晴幸又一郭ヲ添フ、今ノ勸助曲輪、是ナリ、

二年三月、信玄謙信マタ大ニ河中島ニ戰ヒ、甲斐ノ將山本晴幸、諸角昌清等、戰死ス、八月又大ニ河中島ニ戰フ、今芝村(埴科郡)ニ晴幸ノ墓アリ、マタ氷鉋村(夏級郡)ニ昌清ノ墓アリ、共ニ人ヲシテ、懷古ノ情ニ勝ヘザラシム、

永祿四年三月、仁科盛政密ニ志ヲ上杉氏ニ通ス、信玄盛政ヲ誅シ、五子信盛ヲシテ、仁科氏ヲ繼ガシメ、高遠城ニ居ラシム、

川中島第五戰

永祿四年川中島對陣圖



四年八月、謙信マタ河中島ニ出テ、妻女山(埴科郡)ニ陣ス、信玄茶臼山(夏級郡)ニ陣シ、兩宮渡ヲ扼シ、謙信ノ歸路ヲ絶ツ、越軍動カズ、信玄乃兵ヲ收メテ、海津城ニ入り、兵ヲ分テ二軍トシ、一軍ヲシテ妻女山ニ向ハシメ、自一軍ニ

將トシテ、廣瀬ヲ渡リ、河中島ニ陣シ、夾テ越軍ヲ撃タントス、謙信疑兵ヲ山上ニ置キ、全軍兩宮ヲ渡リ、信玄ノ軍ヲ壓シテ陣ス、曉ニ及ンテ謙信ノ牙旗前ニ在リ、甲軍大ニ驚ク、越軍鼓ヲ進撃ス、信玄陣ヲ易フルニ暇アラズシテ潰亂ス、謙信既ニ克チ、休止シテ餐ヲ傳フ、甲軍返シ襲テ大ニ越軍ヲ敗リ、越後ノ將、志田義時以下數十人ヲ斬ル、謙信乃兵ヲ收メテ歸ル、

武田信玄約ヲ重シス

甲越和ス

武田、上杉二氏ノ河中島四郡ヲ争フヤ、十五年ノ久シキ勝敗決スルナシ、遂ニ各勇士一人ヲ出シテ闘ハシメ勝敗ニ依テ、領主ヲ定メンコトヲ約ス、上杉氏ノ勇士勝テリ、武田氏ノ諸將

大ニ憤リ、將ニ再、戰端ヲ開カントス、信玄曰、勝敗ニ依テ、領主ヲ定ムルノ約アリ、君子ニ二言ナシ、約ヲ變スルハ、武士ノ最恥ルトコロナリト、海津ノ一城ヲ取テ、其餘盡上杉氏ニ與フ、謙信乃村上、高梨等ヲ故地ニ復ス、

宇佐美定行ノ忠死

謙信政景ヲ殺ス

野尻城(上水内郡)ハ上杉氏ノ將、宇佐美定行ノ居城ナリ、謙信、義兄長尾政景ヲ忌ミ、定行ヲシテ之ヲ殺サシメントス、定行諫曰、政景ハ義兄ナリ、之ヲ殺サハ不義ノ名ヲ負ハン、且罪ナクシテ之ヲ殺サバ、或ハ變ヲ生ゼント、謙信聽カス、定行思ラク、政景ヲ殺サマレハ主命ニ背クナリ、若シ之ヲ殺サンカ、主ナシ

テ不義ノ名ヲ負ハシメ、且内變ヲ生ズルヲ如何セン、若カズ、
自ラ罪ヲ負フテ、事ヲ全ウセンニハト、乃野尻ニ歸リ、政景ヲ
招キ、湖中ニ漁シ、共ニ漏船ニ乘リ、政景ヲ捉テ、共ニ湖中ニ沈
ミ、私ノ憾ヲ以テ相殺スト、流傳セシム、之ニ依テ、國內事ナキ
ヲ得タリ、實ニ永祿七年七月ナリ、

上杉謙信ノ義氣

來
由
市
給

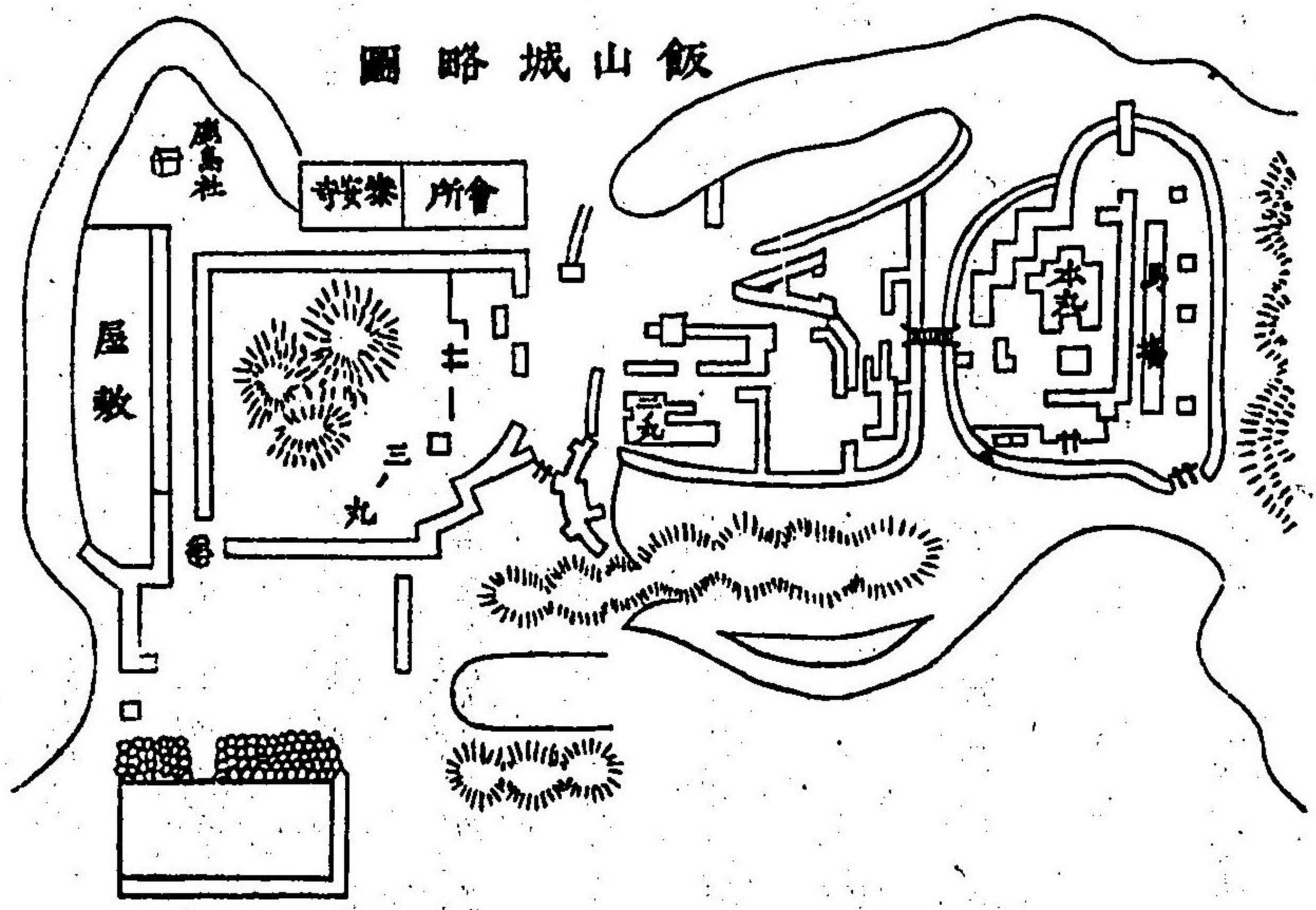
甲斐、信濃ハ山國ニシテ、古來鹽ヲ東海道ニ仰ク、駿河ノ今川
氏、相摸ノ北條氏、共ニ謀テ、商人ノ鹽ヲ甲信ニ送ルヲ禁ズ、二
國ノ民、大ニ困ム、上杉謙信聞テ曰ク、今川北條二氏、武ヲ以テ
信立ニ敵スル能ハズ、今鹽ヲ禁シテ二國ノ民ヲ困マシム、民

果シテ何ノ罪アル、余信立ト仇讐タリト雖、豈坐視ス可ケン
ヤト、依テ書ヲ信立ニ贈リ、商人ナシテ、價ヲ平カニシテ北鹽
ヲ送ラシム、實ニ永祿十一年一月ナリ、今松本町ニ於テ、一月
十一日ヲ給市ト稱シ、市神ニ鹽ヲ捧ケ、初市ヲ行フ、是レ北鹽
ノ初メテ至リタルノ日ニシテ、遠近ノ四民嬉ヒ來テ、鹽ヲ求
メタルノ遺風ナリト云フ、

信立墓

信立、織田信長及徳川家康ト、屢兵ヲ交フ、天正元年、信立兵ヲ
遠江ニ出シ、家康ヲ濱松城(遠江)ニ攻メ、創テ病ンテ國ニ歸ラン
トシ、平谷(下伊那郡平瀨村)ニ至リテ死ス、世ニ傳フ、信立ノ死ズルヤ、其
遺命ニ依リ、屍ヲ石棺ニ盛リ、諏訪湖ニ沈ムト、然レモ、信立ノ

飯山城成
天正七年
九龍元二二三



墓、今横旗(下伊那郡根羽村)ニ在リ、子勝頼代テ國政ヲ視ル、勝頼、性剛愎ニシテ、宿將ノ諫ヲ聽カス、隣國ヲ蠶食シテ、怨ヲ四隣ニ構ヒ、國內マタ怨望スル者多ク、木曾義昌、先款ヲ織田氏ニ通ス、

天正七年、飯山城成ル、上杉氏ノ築ク所ナリ、
織田氏

織田氏武田氏ヲ亡ス

十年織田信長、徳川氏ト共ニ武田氏ヲ討ツ、長子信忠、先鋒トナリ、伊那郡ニ入り、松尾、飯田ノ諸城ヲ陷ル、木曾義昌モ亦、武田氏ノ將、武田信豊ヲ鳥居峠ニ破リ、進テ桔梗原ニ陣ス、此時ニアタリ、伊那ノ豪族小笠原(松尾城主)保科(飯田城主)等、前後相降リテ、織田氏ニ屬シ、武田氏ノ諸將、多クハ城ヲ棄テ、遁ル、信忠進テ高遠城ヲ圍ム、城遂ニ陥リ、城將仁科信盛、之ニ死シ、仁科ノ舊家、コ、ニ至テ全ク斷ユ、今高遠ニ信盛ノ墓アリ、信忠、連リニ諏訪、深志ノ諸城ヲ陷レ、進テ甲斐ニ入り、勝頼ヲ天目山(甲斐)ニ殺ス、武田氏亡フ、信長乃安筑二郡ヲ木曾義昌ニ、伊那ヲ毛利秀頼ニ、諏訪ヲ川尻秀隆ニ、川中島四郡ヲ森長可ニ、佐

久、小縣ヲ瀧川一益ニ賜フ、眞田昌幸舊邑ヲ保チテ、一益ニ屬ス、

國內大ニ亂ル

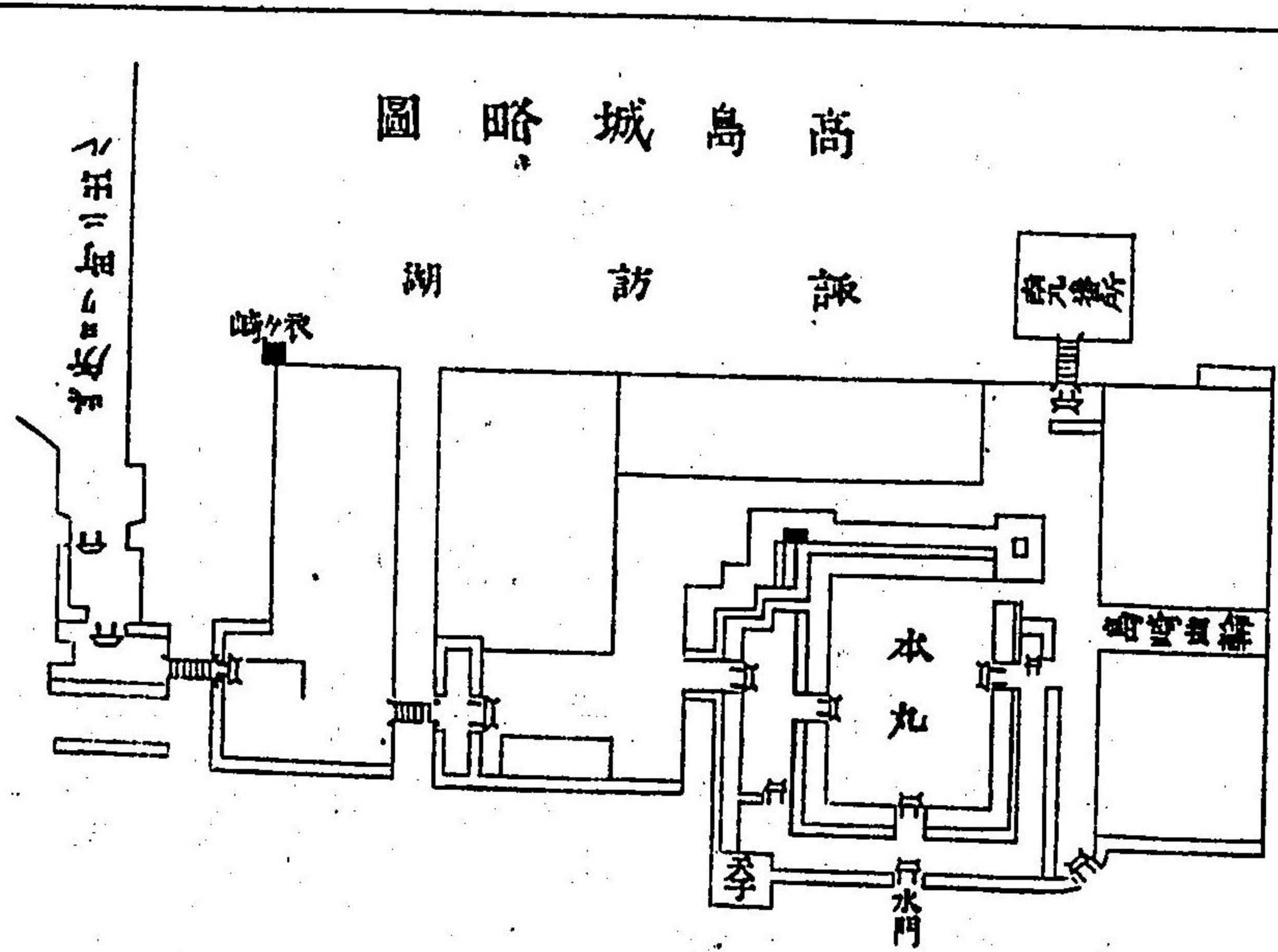
十年六月、明智光秀、信長ヲ弑スルニ及ヒ、諸將領土ニ安ンズル能ハズ、各城ヲ棄テ、京ニ上リ、國內大ニ亂ル、北條氏直、佐久及川中島ヲ侵ス、上杉景勝、北條氏ヲ破リ、四郡ヲ略シ、又兵ヲ安曇、筑摩ニ出シ、深志城ヲ取レリ、小笠原長時ノ三男貞慶、長時ノ敗ル、ニ及ビテ、諸國ニ流寓シ、常ニ舊地ヲ回復スルノ志アリ、此時信濃ニ來リ、潛ニ鹽尻ニ匿レ、時ノ至ルヲ待テリ、コ、ニ於テ、舊臣ヲ招キ、急ニ深志城ヲ襲テ、上杉氏ノ守兵ヲ逐ヒ、遂ニ安筑二郡ノ舊地ヲ領シ、深志ヲ改メテ、松本ト號シ、

大ニ城池ヲ改修セリ、諏訪頼茂ノ從弟頼忠モ、亦舊臣ヲ招キ、兵ヲ起シ、諏訪郡ヲ領シ、保科正直ハ高遠ヲ復セリ、徳川家康ハ兵ヲ佐久郡ニ出シ、諸城ヲ陷レ、北條氏ノ侵地ヲ略ス、其後國內ノ諸豪族、前後概徳川氏ニ屬ス、

上田合戦

眞田昌幸、兵ヲ上野ニ出シ、連ニ北條氏ノ九城ヲ陷ル、徳川、北條ノ二氏、和成ルニ及ンテ、家康、昌幸ヲシテ、上野ノ侵地ヲ北條氏ニ返サシム、昌幸命ヲ奉セス、豊臣氏ニ屬シ、好テ上杉氏ニ通ス、家康乃大久保忠世、鳥居元忠等ヲシテ、上田城ヲ攻メシム、昌幸ノ父子、頗兵法ニ精ク、屢奇計ヲ以テ、徳川氏ノ軍ヲ敗ル、家康遽ニ勝ツ可カラザルヲ知り、忠世ヲシテ、小諸城ヲ

秀吉功臣ヲ封ス



守テ眞田氏ニ備ヘシメ、兵ヲ退ク、

豊臣氏

天正十八年、豊臣秀吉、天下ヲ平定スルニ及ンテ、徳川家康ヲ、北條氏ノ舊領、關東八州ニ封ズ、國內ノ豪族、小笠原、諏訪、保科、木曾等、家康ニ屬シテ、關東ニ移ル。秀吉乃、安曇、筑摩ノ二郡ヲ石川數正ニ、伊那郡ヲ

高島城成

上田合戦 慶長五年 〇紀元二二六

京極高政ニ、佐久、小縣ノ二郡ヲ、仙石秀久ニ、諏訪郡ヲ、日根野高吉ニ與フ、然シテ上杉氏、猶河、中島、四郡ヲ領ス、日根野氏、高島城ヲ築ク、

慶長五年、石田三成等、秀頼ヲ奉ジテ、兵ヲ起シ、徳川氏ヲ亡サント欲シ、進テ美濃國關ヶ原ニ陣ス、徳川家康、東海道ヨリ進ミ、秀忠、東山道ヨリ進ム、眞田昌幸、二子幸村、三成ニ應ジ、上田ニ據テ、秀忠ノ軍ヲ遮ル、秀忠之ヲ攻ムルヲ數日、遂ニ利アラズ、秀忠、仙石氏ヲシテ、上田ニ備ヘシメ、進テ、木曾ニ至ル、尾張犬山ノ城主、石河貞清、三成ニ應ジ、木曾ノ山路ニ據リ、秀忠ヲ遮ル、秀忠乃、木曾氏ノ遺臣、山村良勝、千村吉晴ヲシテ、木曾ヲ

徇ヘシム、此ニ於テ山道始メテ通ズ、然レモ遂ニ關ケ原ノ戰期ニ後ル、家康大ニ三成ノ軍ヲ破リ天下ノ大權德川氏ニ歸ス、

家康功臣ヲ封ス

家康大ニ功臣ヲ封ジ、河中嶋四郡ヲ森忠政ニ、佐久、小縣ヲ仙石秀久ニ、上田ヲ眞田信幸ニ、高遠ヲ保科正直ニ、飯田ヲ小笠原秀政ニ、諏訪ヲ諏訪頼水ニ與ヘ、山村良勝ヲシテ、木曾ノ代官タラシメ、後尾張ニ屬シ福島ノ關ヲ守ラシム、

眞田信幸ノ孝悌

關ケ原凱旋ノ後、家康、眞田信幸ヲ召シテ曰、父昌幸弟幸村ヲ誅ス可シ、汝ヲ賞スルニ、信濃一國ヲ以テセント、乃墨附ヲ與

フ、信幸辭テ曰、不孝不悌ハ、臣ノ爲ニ忍ビザル所、今日賜フ所ノ墨附、及上田城ヲ獻ジテ、流浪ノ身トナルモ、父弟ノ罪ヲ赦サル、ナ得バ、何ノ幸カ之ニ過ギント、家康、信幸ノ心ヲ愍ミ、遂ニ昌幸父子ヲ赦ス、

眞田幸村父子ノ忠死

元和元年
五月三十七日

元和元年、豊臣氏ノ亡ブルヤ、眞田幸村、豊公ノ舊恩ヲ報イント欲シ、秀頼ニ屬シ、屢奇計ヲ以テ、德川氏ノ軍ヲ破ル、家康、幸村ノ叔父、信尹ヲシテ、幸村ニ説カシメテ曰、若シ降ラバ、封ズルニ信濃一國ヲ以テセント、幸村辭テ曰、臣一死、豊公ノ舊恩ニ報インノミ、假令日本ノ半ヲ受クルモ、人道ニ背ク能ハズ

大助自殺

ト遂ニ戰死ス、子大助父ニ從テ、大阪城ニ在リ、秀頼ノ死セザル、其行ク所ニ隨フ、衆人諭シテ曰、舊臣スラ逃ル、者多シ、子ハ客將ノ子、強テ殉死スルニ及ハス、速ニ逃レ去ル可シト、大助曰、余ノ父死スルノ前、余ニ遺命シテ曰、今日ノ事、主家存亡ノ決スル所意ニ吾復生テ汝ヲ見ズ、吾已ニ戰死スト聞、モ汝必右府ニ殉ヒ、慎テ死ヲ怯レ義ヲ忘レ、乃父ノ忠ヲ廢スル勿レ、汝ノ吾ニ報ズル所、此ヨリ大ナルハナシト、語猶耳ニ在リ、豈父ノ遺命ニ背キ、不忠不義ノ徒トナランヤト、右府ハ秀頼ヲ云フ、既シテ城郭破レ、東軍火ヲ放テ城樓ヲ燒ク、秀頼倉中ニ徙ル、大助倉外ニ藁ヲ敷キテ之ニ坐シ、食セザル、一晝夜、

秀頼ノ死ヲ俟テ、乃自殺ス、時ニ年十六、聞ク者皆涙ヲ流ス、

徳川氏

慶長八年
三紀元二二六
年

慶長八年、徳川家康、天下ヲ平定シ、征夷大將軍ニ任ゼラレ、政權全ク徳川氏ニ屬ス、九年、松平忠輝ヲ、河中島四郡ニ封ズ、忠輝乃長臣皆川氏ニ、四万石ヲ給シ、飯山城ヲ與ヘ、花井氏ヲシテ、海津城ヲ守ラシメ、改メテ松代城ト號ス、後十五年、越後高田ニ移ル、

維新ノ十
一藩

徳川氏、政權ヲ掌握セシヨリ、王政維新ニ至ルマデ、昌平二百五十年、此間、國內ノ諸城主、屢變更アリシト雖、悉記シ難キヲ以テ、只維新ノ際ニ至ルマデノ、諸侯ヲ記サン、元和三年、堀氏、

元禄元年
二三年
四年
八年

須坂ニ封セラレ一万石ヲ領シ、全八年、眞田氏、松代ニ封セラレ十萬石ヲ領シ、寛文十二年、堀氏、飯田ニ封セラレ一万七千石ヲ領シ、元禄四年、内藤氏、高遠ニ封セラレ三萬三千石ヲ領シ、全十五年、牧野氏、小諸ニ封セラレ一万五千石ヲ領ス、寶永元年、大給氏、田ノ口ニ封セラレ、一万六千石ヲ領ス、龍岡藩ト稱ス、全三年、松平氏、上田ニ封セラレ、五萬三千石ヲ領ス、享保二年、本多氏、飯山ニ封セラレ、二萬石ヲ領ス、全十一年、戸田氏、松本ニ封セラレ、六萬石ヲ領ス、諏訪ノ高島ハ、慶長六年、諏訪頼水ノ封セラレシ以來、城主變更スルコトナク、三萬石ヲ領ス、岩村田ノ内藤氏ハ、元禄中ニ封セラレタル者ニシテ、一万五

元和元年
二三年
七年

千石ヲ領シ、元和元年ニ城郭ヲ築ケリ、國內筑城ノ最新キモノナリ、以上ヲ信濃ノ十一藩ト稱ス、此他、名古屋藩、高須藩、白川藩、椎谷藩ノ采邑、幕府領、旗下領等多ク、國內ヲ小分シテ、各異ル政治ヲ爲シ、王政維新ノ時ニ及ベリ、

徳川時代ノ天災

寛保ノ洪
水
二年
四年
七年

寛保二年、夏七月ヨリ八月ニ至ルマデ、大風雨アリ、國內ノ大河、大ニ出水シ、橋梁悉流落シ、田畑ノ流失、家屋ノ漂没、人畜ノ溺死、殆萬ヲ以テ數フ可ク、實ニ古今稀ナル洪水ナリシ、千曲川モト、松代ノ城下ヲ流レンシモ、此洪水ノ爲ニ、河道全ク變ジテ、今ノ位置トナレリ、

淺間ノ噴火
天明三年
三紀元二四四

天明三年七月、淺間山噴火俄ニ甚シク、山鳴リ地震ヒ、砂土ヲ雨ニ深サ數丈ニ至リ、近傍數十里ノ地、暗黑夜ノ如ク、次テ大石ヲ飛ハシ、熱泥ヲ吐キ、家屋粉塵セラレ、人畜死傷シ、其悲惨ナルヲ、未曾聞カザル所ナリシ、

善光寺地震
弘化四年
七紀元二五〇

弘化四年三月、國內大ニ地震シ、善光寺平、尤甚シク、家屋概破壞セラレ、丹波島、稻荷山ノ二驛、及善光寺町、殆燒土トナレリ、殊ニ此時、如來ノ開帳ニシテ、遠近ノ男女、來集セシカバ、爲ニ死スル者、三千餘人、今寺内ニ墓アリ、又岩藏山(夏坂郡)崩レテ、犀川ヲ壅グ、二十一日、大水一時ニ決シ、河中嶋ノ田畑、家屋、人畜ノ流亡セシ者、數ヲ知ラズ、世ニ善光寺ノ大地震ト云フ、

太宰純

太宰純、字ハ德夫、春臺ト號ス、飯田ノ人ナリ、初メ父ニ從ヒ、江戸ニ出テ、稍長シテ、出石侯ニ仕フ、後京師ニ適キ、五畿ノ間ニ遊フ、十年、再江戸ニ歸ル、時ニ荻生徂徠復古ノ學ヲ唱フ、純乃徂徠ニ就テ、古學ヲ講ズ、純性剛毅、方正ヲ以テ自居リ、直言ニシテ、毫モ避クル所ナシ、徂徠死スルノ後、經學ヲ以テ鳴ル、前後見ル所ノ諸侯多シト雖、未己テ枉テ仕テ求メズ、岩村侯ノ世子、純ヲ師トス、初メテ至ルキ、世子送迎セズ、純怒曰、余ノ說ク所ハ聖人ノ道ナリ、苟モ道ヲ奉ズル者ハ、王侯ト雖、禮ナカル可カラズ、今余ヲ送迎セザルハ、余ニ禮ナキニアラズ、即

延享四年
紀元二四〇
七年

道ヲ奉セザル者ナリ、道ヲ奉セザル者、余再見ルヲ欲セズト、
侯時ニ老中タリ、威權甚ダ盛ナリ、然レモ憚ラザル、此ノ如
シ、世子聞テ其後禮ヲ厚クシテ事フ、純能ク笛ヲ吹ク、東台法
親王、純ヲ召シテ笛ヲ吹カシム、純辭シテ曰、余ハ儒生ナリ、樂
人ニアラズト、是ヨリ終身マダ笛ヲ吹カス、純博學洪識ニシ
テ、天下ノ諸學ニ通ゼザルナシ、尤心ヲ經濟ニ留メ、經濟錄ヲ
著ハス、延享四年卒ス、年六十八、江戸谷中天眼寺ニ葬ル、

阿藤

阿藤ハ飯田ノ士、山口氏ノ女ナリ、初飯田侯妻アリ、豊浦ト云
フ、美ニシテオアリ、書及和歌ヲ善クス、侯深ク之ヲ寵シ、言聽カ

レザルナク、威權内外ヲ傾ケ、物論洵々將ニ變テ生ゼントス、
老臣安富氏、侯ヲ諫メ、豊浦ヲ黜ク、侯豊浦ノ色ヲ忘ル、一能
ハズ、名ヲ若山ト改メ、再召テ邸ニ入ル、寵遇マダ盛ニシテ、威
權昔日ニ百倍ス、閩藩ノ士、只切齒スルノミ、如何トモスル、
能ハズ、阿藤嘗書及和歌ヲ若山ニ學ブ、此ニ至テ若山ノ爲ス
所ヲ憎ミ、事ニ託シテ師弟ノ義ヲ絶ツ、時ニ若山ノ驕横益甚
シク、變亂將ニ至ラントス、一日、阿藤ヒ首ヲ懷ニシ、若山ノ房
ニ行キ、徐ニ其罪ヲ詰ル、若山答フル能ハス、起テ之ヲ避ント
ス、阿藤罵テ曰、奸婦汝ニシテ死セスンハ、必公家ヲ誤ラント、
ヒ首ヲ懷ニ取テ、遂ニ之ヲ刺シ、若山ヲ殺ス、侯吏ニ命ジ、阿藤

天保十一年
○紀元二五〇

ヲ縛シテ飯田ニ送り刑ニ所ス阿藤刑場ニ到ル吏言ハント
 欲スル所ヲ問フ答テ曰妾ノ罪大ナリ事此ニ至ル豫メ期ス
 ル所ナリ只父ノ妾ノ故ニ罪ヲ得ハ不孝是ヨリ大ナルハナ
 シ希クハ妾ノ爲ニ之ヲ父ニ謝セラレンコトヲ吏曰汝ノ父
 關卒ニ貶セララル然レモ法ノ止ヲ得ザルニ出ルノミ久シカ
 ラズシテ舊官ニ復ス可シト阿藤拜謝シ從容死ニ就ク此日
 赦書江戸ヨリ來ル然レモ遂ニ及バズ聞ク者悼惜涙ヲ出サ
 ザルナシ有司屍ヲ長源寺ニ葬ル阿藤時ニ年二十二實ニ天
 保十一年十二月二日ナリ

佐久間象山

文化八年
一紀元二四七

佐久間象山像



象山ハ佐久間一學ノ長子
 ナリ母ハ荒井氏文化八年
 八月ヲ以テ松代町ニ生ル
 幼名ヲ啓之助ト云フ年甫
 テ三歳一日乳母ニ負ハレ
 テ寺ニ詣ル寺門ニ禁葷酒
 ノ碑アリ象山ノ熱視シ
 指頭ヲ以テ乳母ノ背ニ摸
 書ス乳母邸ニ歸リ之ヲ一
 學ニ語ル一學試ニ紙筆ヲ

象山ニ與フ、象山笑ヲ含ンテ、禁ノ一字ヲ書セリ、七歳ニ至リ、
 學バザルノ書ヲ讀ミ、習ハザルノ畫ヲ圖セリ、十一歳ノ時ヨ
 リ、武ヲ講ジ、文ヲ學ビ、兼テ水練ノ術ヲ學ベリ、十四歳ニシテ
 砲術ヲ學ビ、一種ノ速射砲ヲ發明セリ、然レモ容貌愚ナルガ
 如ク、言語極テ少ク、他童ノ來テ嘲ル者アルモ、更ニ争フコト
 ク、莞爾トシテ笑フノミ、人呼テ佐久間ノ痴漢ト云フ、
 長ズルニ及ビテ、山野ノ間ヲ跋涉シ、林ヲ練リ氣ヲ養ヒ、慨然
 トシテ天下ニ志アリ、最心ヲ海防ノ事ニ注グ、江戸ニ出テ、
 儒學ヲ佐藤一齋、林述齋ニ受ク、一齋竊ニ許スニ絶世ノ偉人
 ナリテセリト云フ、象山、晨ニ時勢ノ變遷ヲ看破シ、坪井信道

ニ就テ、蘭學ヲ學ビ、銃砲、兵制、築城、造船等ノ諸技ヲ研究シ、日
 トシテ海防ノ事ヲ講セザルハナシ、後木挽町(東京市京橋區)ニ住シ、和
 漢洋ノ三學ヲ教授ス、

天保四年、藩主眞田氏、幕府ノ閣老トナル、藩主乃象山ヲ用井
 テ顧問トナシ、大ニ爲スアラントス、象山モ亦時務八策ヲ獻
 ゼシカ、藩主久シカラズシテ、閣老ヲ辭シ、策モ亦遂ニ行ハレ
 ズシテ止ムニ至レリ、

嘉永六年、米國ノ軍艦四隻、浦賀ニ入ル、象山直ニ浦賀ニ行キ
 其狀況ヲ視察シテ、藩主ニ報ゼリ、次テ米使、ベルリ、幕吏ニ應
 對シテ、頗驕傲ナリ、象山慷慨ニ堪ヘズ、幕府ニ上書シテ十策

嘉永六年
三和元二五

吉田松陰

ヲ奉リ、大ニ海防ノ嚴ニス可キヲ論ゼリ、是亦用井ラレザリ
 シカバ、象山憂國ノ念、彌切ナリ、時ニ門生ニ、吉田松陰アリ、頗
 有爲ノ士ナリ、象山、松陰ニ説テ曰ク、當今ノ務ハ、海外ニ航シ
 テ、其事情ニ通ジ、然シテ後、國是ヲ定ムルヨリ急ナルハナシ
 ト、此ニ於テ、松蔭、下田(伊豆)ニ行キ、竊ニ米船ニ投ジテ、海外ニ遊
 ハントセリ、米使諾セス、之ヲ送り還ス、幕府、松陰ヲ捕テ獄ニ
 下ス、行李ノ中ニ、象山送別ノ詩アリ、依テ亦象山ヲ獄ニ下セ
 リ、安政元年ニ至リ、象山ヲ松代ニ移ス、禁錮故ノ如シ、
 此時ニ當テ、經世ノ才ヲ抱キ、學問ノ博識見ノ高、天下又象山
 ニ及ブ者ナシ、元治元年三月、朝命ヲ以テ、將軍家茂、象山ヲ京

安政元年
四月二五日

ニ召シ、時勢ヲ諮フ、象山攘夷ノ行ヒガタキヲ悟リ、開港策ノ
 必要ヲ論ズ、時ニ薩長諸藩ノ士、京ニ集リ、攘夷ヲ主張ス、象山
 ノ開港論ヲ聞テ、大ニ奮激シ、竊ニ象山ヲ刺サントス、山階
 宮、象山ノ説ヲ嘉シ、密ニ勅論文ヲ草セシメ、給フ、象山命ヲ受
 ケ、稿ヲ草シテ、山階宮ニ到リ、歸路遂ニ暗殺セラル、實ニ七
 月十一日ナリ、

武田耕雲齋

元治元年五月、水戸藩ノ正黨、藤田小四郎(東湖四子)兵ヲ常野ノ間
 ニ起ス、武田耕雲齋、奸黨ノ國事ヲ誤ランコトヲ憂テ、正黨ニ加
 ハリ、將ニ大ニ爲スアラントス、幕府、奸黨ヲ援ケ、諸藩ニ命ジ

テ、武田等ヲ討タシム、武田等、京ニ到リ、一橋慶喜ニ訴ントス、十一月、中仙道ニ出テ、碓氷ヲ踰テ信濃ニ入ル、岩村田、小諸ノ二藩、兵ヲ出サズ、上田藩兵ヲ武右(小縣郡)ニ出ス、武田等既ニ和田嶺ニ向フ、松本、高嶋ノ二藩、兵ヲ出シテ之ヲ遮ル、武田等戰テ之ヲ破ル、高遠藩モ亦兵ヲ出ス、然レモ遮ル能ハズ、武田等遂ニ伊那ヨリ美濃ニ出テ、

王政維新ヨリ今日ニ至ル

慶應三年十月、徳川慶喜、表ヲ上テ大政ヲ奉還ス、今上皇帝、其奏ヲ許シ、大政復古ヲ列藩ニ布告シ給フ、明治元年、慶喜、京ニ敗レテ江戸ニ還ル、此ニ於テ、熾仁親王

王政復古
慶應三年
七月

明治元年
八月
二五

飯山ノ役

テ東征大總督ニ任ジ、東海、東山、北陸ノ三道ヨリ、進テ徳川氏ヲ征討セシム、山道ノ總督岩倉具定、美濃ヨリ信濃ニ入ル、國內ノ諸侯、悉歸順ス、官軍進テ江戸ニ迫ル、慶喜、恭順罪ヲ謝シ、江戸城ヲ致ス、徳川氏血氣ノ臣、手ヲ拱シテ霸業ヲ失フニ平カナラズ、東北ノ諸藩ト連合シテ、大ニ爲スアラントシテ、江戸ヲ脱スル者多シ、賊將古屋作左衛門、初關東ニ敗レ、越後ニ走り、轉ジテ信濃ニ入り、飯山城ヲ圍ム、城兵肯テ出デス、松代及尾張藩ノ兵、行テ飯山ヲ援ケ、四月二十五日、内外ヨリ夾撃チテ大ニ賊ヲ破ル、賊又越後ニ走ル、次テ國內ノ諸藩、兵ヲ越後及關東ニ出シ、賊軍ト戰フ、八月始メテ伊那縣ヲ置カル、

二年六月、東北平クテ以テ、大ニ有功ヲ賞セラレ、眞田氏三万石、松平氏、戸田氏、各三千石ノ賞典ヲ受ク、次テ國內ノ諸侯、藩籍ヲ奉還セシテ以テ、諸侯ノ稱ヲ廢セラレタルモ、猶知藩事ニ任セラレ、舊領地ヲ支配セリ、

三年九月、中野縣ヲ置カル、此年國內ノ民、藩札ノ兌換及貢米等ニ、不平ヲ鳴ラシ、前後各地ニ蜂起シテ、竹鎗席旗ヲ弄シ、中野縣下、最慘狀ヲ極メ、遂ニ縣廳ヲ燒クニ至レリ、然レモ日ヲラズシテ、悉鎮定シ、首魁ヲ刑ニ所ス、

四年六月、中野縣ヲ廢シ、更ニ長野縣ヲ置キ、七月更ニ各藩ヲ廢シテ縣トナシ、十一月ニ至リ、各縣ヲ廢シ、長野、筑摩ノ二縣

土境

廢藩置縣

御巡幸

ナ置キ、長野縣ヲシテ、水内、高井、更級、埴科、小縣、佐久ノ六郡ヲ管轄セシメ、筑摩縣ヲシテ、筑摩、安曇、諏訪、伊那ノ四郡、及飛騨國ヲ管轄セシメ、舊藩知事ヲ華族トシ、東京ニ貫屬ス、此ニ於テ、諸侯悉藩地ヲ去テ、東京ニ移轉シ、封建ノ制廢セラレテ、全ク郡縣ノ制トナレリ、九年八月ニ至リ、筑摩縣ヲ廢シ、長野縣ヲシテ全國ヲ管轄セシム、

十一年七月、郡區町村編制法ヲ發布セララル、水内、高井、伊那ノ三郡ヲ上下ニ、筑摩郡ヲ東西ニ、安曇、佐久ノ二郡ヲ南北ニ分チ、十六郡トナシ、郡役所ヲ置キ、郡長ヲシテ郡内ノ政治ヲ司ラシム、此年、今上皇帝東北ノ御巡幸アリ、車駕碓氷嶺ヲ

踰エ、北國街道ヲ經テ、越後ニ出テ給フ、十四年五月ニ至リ、再
信濃ニ御巡幸アリ、車駕甲斐ヨリ入り、諏訪、松本ヲ經テ、木
曾ヨリ美濃ニ出テ給フ、

七道開鑿

十五年、長野縣會、八十五万ノ土木費ヲ議決シ、七道ヲ開鑿ス、
輕井澤ヨリ群馬縣ノ境ニ至ルヲ、第一線路ト云ヒ、上田ヨリ
松本ニ達スルヲ、第二線路ト云ヒ、飯山ヨリ魚沼郡(越後)ニ出
ヅルヲ、第三線路ト云ヒ、飯田ヨリ根羽ヲ經テ三河ニ達スル
ヲ、第四線路ト云ヒ、犬町ヨリ糸魚川ニ出ヅルヲ、第五線路ト
云ヒ、藪原ヨリ美濃ニ達スルヲ、第六線路ト云ヒ、諏訪ヨリ甲
斐ニ出ヅルヲ、第七線路ト云フ、

結論

以上記スル所ハ、信濃歴史ノ大要ニ過ギズト雖、天下ノ大勢
ニ關スルモノハ、亦略之ヲ記セリ、讀者幸ニ此書ヲ一讀シ、治
亂興亡ノ因ヲ來ル所ヲ考ヘ、忠臣義士孝子節婦ノ蹟ニ鑑ミ、
以テ我國祖先ノ美名ヲ辱ムルコトナク、又他日、日本帝國史ヲ
讀ムノ階梯タルヲ得バ、著者ノ希望足レリ矣、

信濃歴史談

信濃歴史談

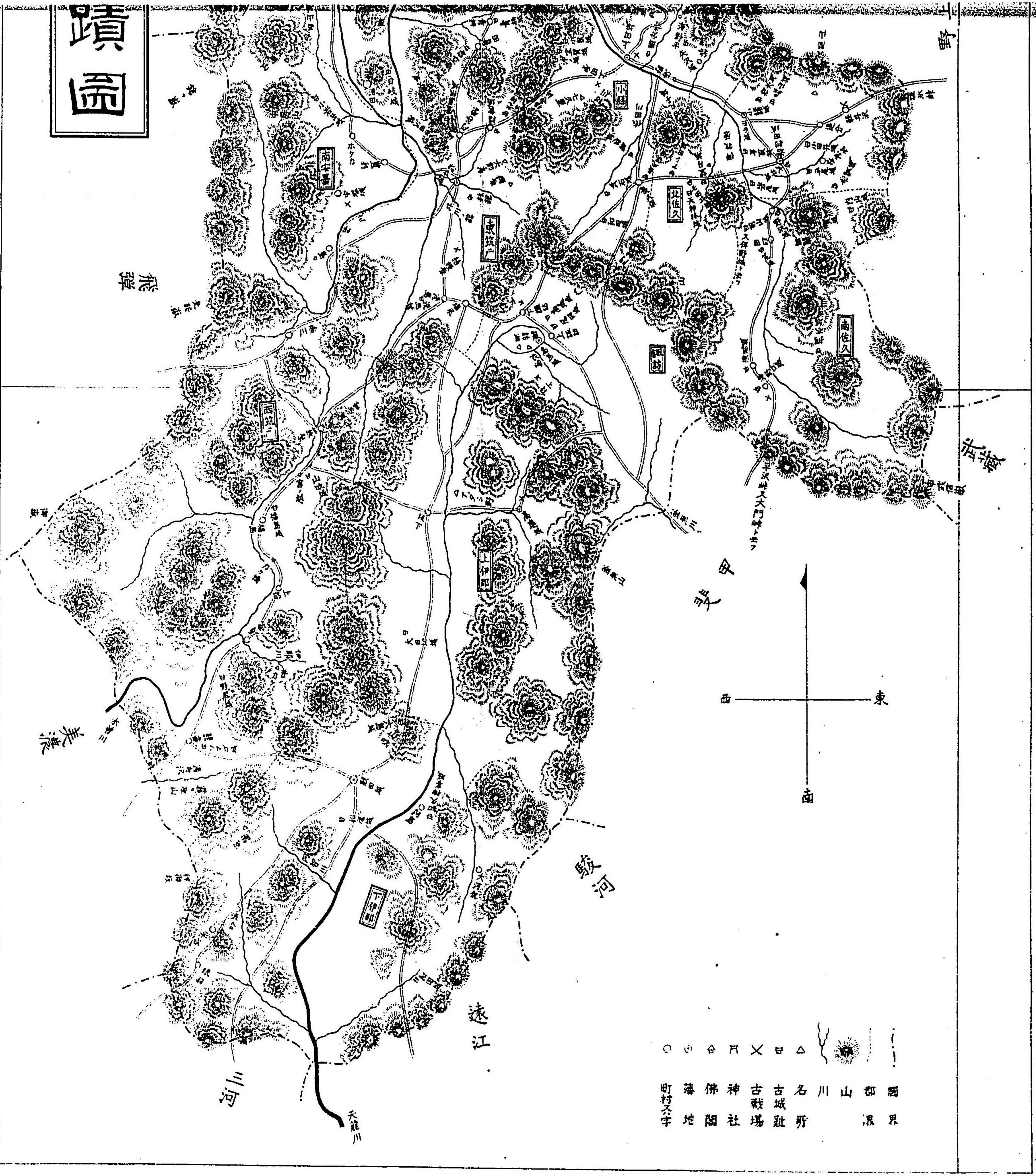
信濃歴史談 終

信濃國古蹟圖



信濃歴史談終

蹟園



信濃歴史談附録

城主交代年譜附山村氏

深志城

深志城

當城ハ、永正元年、小笠原氏ノ族、島立右近ノ、築ク所ニシテ、天正十年ニ至リ、小笠原貞慶、深志ヲ改メテ、松本ト稱ス、文祿二年ニ至リ、石川康長、天主閣ヲ起ス、

城主 島立氏

永正元年、島立右近ノ築キシヨリ、其子七藏ニ至ルマテ、二代十八年間ニシテ、大永元年ニ至リ、七藏死シ、其後、城主暫ク定マラス、

城主 水上氏

大永三年、小笠原氏ノ族、水上宗淳ト云フ者、仁科ヨリ移リテ、在城ス、天文三年死ス、

城主 小笠原氏

天文三年、小笠原長時、鼻籠城(林ノ館ニシテ、今、東ノ城山ト稱ス)ヨリ移リ、在城ス、全二十二年、長時枯槁原ニ敗レテ、後、武田氏ノ所領トナル、

領主 武田氏

天文二十二年ヨリ、武田氏、日向昌時ヲ城代トナシ、其後、宗督ヲ城代トナシ、宗督死スルノ後、馬場昌房ヲ城代トス、此間三十年ニシテ、武田氏亡フ、

城主 木曾氏

天正十年、武田氏亡フ、依テ織田氏木曾義昌ヲ安筑二郡ニ封ス、義昌移リテ在城ス、

領主 上杉氏

天正十年六月、織田信長其臣明智光秀ニ弑セラレ、國內亂ル、上杉景勝兵ヲ率テ信濃ニ入り、遂ニ當城ヲ略シテ、城代ヲ置ケリ、

城主 小笠原氏

天正十年八月、小笠原貞慶、兵ヲ起シ、上杉兵ノ守兵ヲ逐テ、城主トナル、

城主 石川氏

天正十九年、豐臣秀吉、石川數正ヲ封ス、十萬石ヲ領ス、慶長十八年ニ至リ、改易トナル、

城主 小笠原氏

慶長十八年、小笠原秀政、封セラレ、飯田ヨリ移リ在城ス、八萬石ヲ領ス、元和三年、秀政ノ子忠政、二萬石ヲ加増シテ、播州明石ヘ移ル、

城主 戸田氏

元和三年、戸田康長、上州高崎ヨリ移リ、七萬石ヲ領ス、寛永十年、康長ノ子康直ニ至リ、播州明石ヘ移ル、

城主 松平氏

寛永十年、松平直政、越前大野ヨリ移リ、七萬石ヲ領ス、寛永十五年、豐州松江ヘ移ル、

城主 堀田氏

寛永十五年、堀田正盛、武州河越ヨリ移リ、十萬石ヲ領ス、全十年、下總佐倉ヘ移ル、

城主 水野氏

寛永十九年七月、水野忠清、三州吉田ヨリ移リ、七萬石ヲ領ス、享保十年ニ至リ、改易トナル、凡六代、八十四年ノ間、城主タリ、

城主 戸田氏

享保十一年、戸田光茲、志州島羽ヨリ來リ、六萬石ヲ領シ、遂ニ關西置縣ノ際ニ及ヘリ、戸田氏ハ、代々松平氏ヲ稱シ、丹波守タリ、

高嶋城

高嶋城

領主 諏訪氏

諏訪郡ハ、往昔ヨリ、諏訪氏ノ所領ニシテ、小城、數多アリ、天文十三年、頼茂、武田氏ニ誘殺セラレ、全郡、武田氏ノ所領トナル、

領主 武田氏

武田氏、諏訪郡ヲ領シ、天文ノ初ヨリ、板垣氏ヲ郡代トセシカ、頼茂ヲ殺シテ、後長坂兵、小宮山兵、市川兵、今福兵等、城代トナリ、天正十年ニ至レリ、

領主 川尻氏

天正十年、織田氏、武田氏ヲ亡シ、川尻重能ヲ封シテ、郡主トナス、織田信長、弑セラレ、ニ及ンテ、國內大ニ亂レ、重能ハ、亂民ノ爲ニ殺サル、ニ至レリ、

領主 諏訪氏

天正十年、國內ノ大亂ニ乘シ、諏訪頼忠、兵ヲ起シテ、全郡ヲ領シ、全十八年、故アリテ、領地ヲ滅セラレ、武州ニ於テ、一万二千石ヲ賜ハル、

城主 日根野氏

城主 諏訪氏

天正十八年、豐臣秀吉、日根野高吉ヲ、諏訪郡ニ封ス、全十九年、高吉、高島城ヲ築ケリ、其子吉明ニ至リ、野州壬生ニ移ル、
慶長六年、諏訪頼水、上州惣社ヨリ、再ヒ高島ニ封セラレ、番地二万五千石ヲ領シ、元和四年、五千石ノ加増アリ、外ニ新開ノ地二千石ヲ合テ、世々三万二千石ヲ領シ、慶長四十年ノ際ニ及

高遠城

高遠城

領主 武田氏

古城ハ、高遠ノ入口笠原ニ其趾アリ、治承中、笠原頼直ノ居城ナリ、永祿中、武田信玄、馬場信房ヲシテ、今ノ城ヲ築カシメ、山本晴幸、一ノ曲輪ヲ添テ、世ニ勸助曲輪ト云フ、當城ハ、往昔青山城ト稱シ、後世、單ニ青山城ト云フ、
安貞寛喜ノ頃、小笠原長清ノ二子、長根、伊那郡ヲ領シ、伊那三郎ト稱ス、觀應文和ノ頃、源義親、高遠ヲ領シ、高遠氏ト稱ス、應仁ノ頃ニ至リ、諏訪頼繼ノ二子、伊那郡ヲ領シ、高遠ニ居リ、亦高遠氏ト稱セリ、
天文ノ頃ニ至レマテ、此地方ハ、保科正直ノ領地ナリ、天文十六年、武田氏、兵ヲ伊那郡ニ出シ、秋山晴近ヲ郡代トス、保科氏、武田氏ニ降リ、晴近、當城ニ居レリ、永祿五年、武田勝頼在城ス、元龜二年ニ至リ、武田信連、城代トナル、天正五年、信玄ノ第五子、信盛、仁科家ノ系統ヲ繼テ、仁科氏ト稱シ、在城ス、全十年三月、織田信忠ニ攻メラレ、落城、信盛自殺ス、

領主 毛利氏

城主 保科氏

天正十年、織田信長、毛利秀頼ヲ、伊那郡ニ封ス、秀頼、飯田ニ居リ、當城ヲ兼領ス、
天正十年、信長、武田ヲ、國內亂ル、保科正直、當城ヲ略取シ、織田氏ニ屬ス、天正十八年、織田氏ニ從テ、關東ニ移リ、越州多高ニ居ル、

領主 毛利氏

城主 京極氏

天正十八年、毛利氏、再ヒ伊那郡ヲ領シ、飯田ニ居リ、當城ヲ兼領ス、後、京極高政、秀頼ノ遺腹ヲ嗣テ、十萬五千石ヲ領ス、毛利秀頼ハ、高政ノ舅ナリ、
京極高知、八万石ヲ領シ、慶長五年、飯田ニ移ル、

編者曰、慶長十八年、毛利氏ノ封セラレタルハ、實ハ毛利氏ニア

ラス、毛利氏ノ女、婿タル京極氏ノ、毛利氏ノ舊領ニ封セラレタルナリ、又京極高知ノ封セラレタル、年月知レズ、

或曰、高政ヲ誤テ二人トナセリト、豈然ラズ、
飯田城ニ付ラモ、亦同レ、諸者、幸ニ知ルアラハ之ヲ救ヘ

城主 保科氏

慶長五年、保科正直、再ヒ當城ニ封セラレ、三万石ヲ領ス、寛永十三年ニ至リ、正直ノ孫、保正之、羽州山形ニ移リ、二十萬石ヲ領ス、

飯田城

飯田城

- 城主 鳥居氏
- 城主 内藤氏

寛永十三年、鳥居忠春、封セラル、三萬石ヲ領ス、其子忠常ニ至リ、故アリ亡フ、
元祿四年、内藤清長封セラル、三萬三千石ヲ領シ、駿海區縣ノ際ニ及ベリ、

鎌倉時代ニ當リテ、近藤近宗、上飯田ニ館ス、其趾、今ニ存セリ、建保年中、坂西宗滿之ニ館シ、後今ノ飯田城ニ移ル、應永ノ頃、飯田基國、在城ス、慶長六年、小笠原秀政、城ノ内外ヲ修築セリ、當城ハ、長姫城ト稱セリ、

- 城主 秋山氏
- 城主 毛利氏
- 城番 菅沼氏
- 城主 毛利氏
- 城主 京極氏

天文ノ初ヨリ、武田氏ノ將、秋山晴近、信玄ノ命ニ依リ、伊那郡ヲ侵略シ、弘治二年、全郡武田氏ノ領トナリ、秋山氏、在城ス、天正元年、澁州岩村城ニ移ル、勝頼、乃チ、保科氏ヲ以テ城代トシ、之ヲ守ラシム、天正十年、賴田氏ノ爲メニ破ラル、

天正十年、賴田氏、毛利秀頼ヲ、伊那郡ニ封ス、秀頼、在城ス、
天正十二年、德川氏、菅沼利定ヲ城番トス、後全十八年、上州吉江二萬石ニ封セラル、
天正十八年、毛利氏封セラル、十萬石ヲ領ス、京極高政繼テ十萬五千石ヲ領ス、

慶長五年、京極高知、高遠ヨリ移リ、全六年、丹後ニ移ル、

海津城

海津城

- 城主 小笠原氏
- 城主 脇坂氏
- 城主 堀氏

慶長六年、小笠原秀政、封セラル、五萬石ヲ領シ、十八年、三萬石ノ加増ニテ、松本ニ移リ、飯田ヲ兼領シ、城代ヲ置キ、元和三年ニ返レリ、
元和三年、脇坂安元、封セラル、五萬石ヲ領シ、其妻子安次ニ至リ、寛文十二年、蒲州龍野ヘ移ル、
寛文十二年、堀親昌、封セラル、二萬石ヲ領シ、駿海區縣ノ際ニ及ベリ、

當城ハ、天文二十二年、武田氏、其將山本晴幸ヲテ、築カシメタル者ニシテ、舊清野氏ノ屋敷趾ナリ、慶長八年、代官所ノ支配タリシ時ニ、待城ト改稱シ、全九年、松平忠輝ノ封セラル、ニ及シテ、松城ト改メ、正徳元年、眞田信房ノ時、幕命ニ依リテ、松代ト稱ス、

天文二十二年、信玄、當城ヲ築キ、小山田昌辰ヲ城代トス、弘治二年ニ至リ、高坂昌信ヲ城代トス、小幡氏、二ノ曲輪ニ居リ、上杉氏ニ備フ、天正六年、昌信死シ、二男源五郎、城代トナル、天正十年、武田氏亡ビ、源五郎、城中ニ於テ殺サル、

天正十年、賴田氏、森長可ヲ封ス、信長試セラル、ニ及シテ、長可、上洛ス、
天正十年、國內ノ亂ニ乘シ、上杉景勝、之ヲ略シ、城代トシテ、隅田氏ヲ置ケリ、

- 領主 武田氏
- 城主 森氏
- 領主 上杉氏

領主 豐臣氏

秀吉天下ヲ平定スルノ前後、田丸正盛ヲ置テ、城ヲ守ラシメ

城主 森氏

慶長五年、森忠政封セラレ、十二万石ヲ領シ、全八年、作州津山

領主 松平氏

慶長九年二月、松平忠輝、川中島四郡ニ封セラレ、其臣、花井義

城主 松平氏

元和元年、松平忠昌封セラレ、十二万石ヲ領シ、全五年、越後高

城主 酒井氏

元和五年、酒井忠昌封セラレ、十二万石ヲ領シ、全八年、羽州鶴

城主 眞田氏

元和八年、上田ヨリ移リ、十万石ヲ領シ、駿河國ノ際ニ及ベ

飯山城

飯山城

天正五年、上杉謙信ノ繩張ニテ、工ヲ起シ、全七年ニ至

領主 上杉氏

飯山城、成レニ及ンテ、上杉氏、其臣、奈良澤、上倉、小佐原、雨條、中

城主 森氏

天正十年、織田氏、森長可ヲ、川中島四郡ニ封ス、長可、在城ス

領主 上杉氏

天正十八年ノ頃、上杉氏ノ領ニシテ、其臣、長井、稻倉等、交番之

領主 森氏

慶長五年、森忠政封セラレ、其臣、關左京城代トナル、全八年、森

領主 松平氏

慶長九年、松平忠輝、川中島四郡ニ封セラレ、其臣、皆川廣照四

城主 堀氏

慶長十九年、堀直寄封セラレ、三万石ヲ領シ、元和二年、越後長

城主 佐久間氏

元和二年、佐久間安次封セラレ、三万石ヲ領シ、寛永五年、其弟

城主 松平氏

寛永十六年、松平忠重封セラレ、四万石ヲ領シ、忠俱、忠敏ヲ經

城主 永井氏

寛永三年、永井忠敏封セラレ、三万二千石ヲ領シ、正徳元年、武

城主 青山氏

正徳元年、青山幸信封セラレ、四万八千石ヲ領シ、享保二年、丹

城主 本多氏

享保二年、本多利久越後ノ糸魚川ヨリ移リ、二万五千石ヲ領

上田城

城主 眞田氏

城主 仙石氏

城主 松平氏

小諸城

小諸城

當城ハ、天文年中、眞田幸隆ノ時、信綱ヲシテ、繩張シテ築カシムト、又一説ニ、天正年中、幸隆ノ時、昌幸ノ繩張ニテ、今ノ本丸、二ノ丸ヲ築ケリト、未タ何レカ、確ナルヲ知ラス、千曲川城下ヲ流レテ、淵ヲ爲ス、尼ヶ淵ト云フ、故ニ、城ヲ尼ヶ淵城ト云フ、又伊勢崎ノ名アリ、

在昔ヨリ、此地方ト、眞田氏ノ領地ニシテ、天文七年、眞田幸隆、村上氏ニ破ラレ、其後、幸隆ニ至リ、武田氏ニ屬シテ、舊領ヲ賜ハリ、上田城ヲ築キ、代々城主トナリ、元和八年ニ至リ、松代ヘ移ル、

元和八年、仙石忠政、封セラレ、六万石ヲ領シ、小諸ヨリ、移リ治ス、政後ヲ經テ、政明ニ至リ、寶永三年、但馬出石ヘ轉ス、

寶永三年、松平忠榮、但馬出石ヨリ、移リ、五万八千石ヲ領ス、其子忠愛ニ至リ、更級郡、川中島五千石ヲ割テ、其弟忠容ニ與フ、故ニ、世々、五万三千石ヲ領シ、廢藩置縣ノ際ニ及ベリ、

上世、手代塚氏、此邊ヲ領シ、小諸殿ト稱ス、今ノ城地ト、西原ノ間ニ、館アリ、其後、大井氏、手代塚氏ヲ亡ハシ、一城ヲ築ケリ、鍋蓋城、又ハ大井城ト云フ、鍋蓋曲輪是ナリ、天文二十二年ニ至リ、武田氏、山本晴幸、馬場信房ヲシテ、城ヲ築カシム、今ノ城是ナリ、

領主 武田氏

城主 通家氏

領主 北條氏

城主 松平氏

城主 仙石氏

領主 忠長公

永祿年中、武田信豐、之ヲ領シ、其臣下曾根覺兼ヲ城代トシテ、之ヲ守ラシム、天正十年、武田氏亡ビ、信豐、逃レテ、小諸ニ來ル、下曾根信豐ヲ殺シ、首ヲ續田氏ニ獻ス、信長、下曾根ノ不職ヲ憤リ、逃ニ之ヲ殺ス、

天正十年、續田氏、瀧川一益ヲ、佐久、小縣二郡ニ封シ、一益ノ甥、通家正榮ニ、當城ヲ與ヘシム、信長、試セラリト、ニ及シテ、一益ト共ニ、京師ニ上ル、

天正十年、信長、試セラレ、國內ノ亂ニ乘リ、北條氏、其臣松井田城主、大道寺政繁ヲシテ、佐久郡ヲ侵略セシメ、遂ニ當城ヲ領シテ、大道寺氏、之ヲ守レリ、

眞田信豐、瀧川氏ニ屬シ、天正十一年、北條氏ニ攻メラレ、岩尾城ニ敗死ス、家康、乃チ信豐ノ子、竹園丸ニ、松平氏ヲ賜ヒ、名ヲ藤園ト改メ、全年三月、大久保忠世ノ援ケテ、以テ、小諸城ヲ攻メ、北條氏ノ守兵ヲ破リ、全十二年、封セラレテ、城主トナル、其弟、廣勝ニ至リ、天正十八年九月、上州藤岡ニ移ル、

天正十八年、豐臣氏、仙石秀久ヲ封ス、五万石ヲ領ス、忠政ニ至リ、元和八年、上田ヘ移ル、

元和八年、大納言忠長、小諸城邑、五万石ニ封セラレ、城代屋代氏、三枝氏ヲ置ケリ、寛永元年ニ至リ、甲州ニ移ル、

城主 久松氏

寛永元年、久松重良、澁州大垣ヨリ移リ、五万石ヲ領シ、小縣郡、
關津五千石ヲ割テ、忠節ニ與フ、正保四年、重良死シ、嗣子ナク、
國除カレ、弟重政、新ニ一万石ニテ、野州長島ニ封セラレ、其後、
當城ニテ、正保四年ヨリ、慶安元年ニ至ルマテ、井戸、堀、杉原ノ
三氏城番ヨリ、代官トシテ、殿樂氏居レリ、

城主 青山氏

慶安元年、青山宗俊、封セラレ、三万石ヲ領シ、寛文二年、二万石
ノ加増ニテ、大阪御城代トナリ、其後、五月ヨリ七月ニ至ルマ
テ、額直吉、城番ヨリ、湊口、能勢ノ二氏、目付役ヲ勤メ、天羽氏、代
官ヨリ、

城主 酒井氏

寛文二年、酒井忠能、封セラレ、三万石ヲ領シ、延寶七年、澁州田
中へ移リ、

城主 西尾氏

延寶七年、澁州田中ヨリ來リ、二万五千石ヲ領シ、天和二年、澁
州額直吉ニ移リ、

城主 石川氏

天和二年、石川乘政、封セラレ、二万石ヲ領シ、其子乗紀、元禄十
五年、澁州岩村へ移リ、

城主 牧野氏

元禄十五年、牧野康實、越後奥板ヨリ移リ、一万五千石ヲ領ス、
然レモ、其實城附ノ城邑、三万石ヲ領シ、澁州額直吉ノ際ニ及ベ

岩村田城

岩村田城

當城ハ、元治元年、内藤氏ノ築ク所ナリ、

城主 内藤氏

元禄年中、内藤正勝、封セラレ、一万五千石ヲ領シ、元治元年、一
城ヲ築ケリ、今ノ岩村田城ニシテ、國內ノ最新城ナリ、澁州
縣ノ際ニ及ベリ、

山村氏

山村氏

山村氏ハ、木曾氏ノ舊臣ニシテ、關ヶ原ノ役、秀頼公ノ命ヲ奉シテ、木曾ヲ詢ヘ、
公ノ先導ヲナセシカバ、其功ニ依リ、木曾ヲ賜フ、然レモ、木曾ハ、深林多ク、古來
瓦材ニ富ムヲ以テ、幕府領トス可キヲ申立テ、遂ニ木曾ハ、幕府領トナリ、山村
氏之ヲ預リ、福島ニ治シ、別ニ領地ヲ、美濃ニ賜ハリ、七千五百石ヲ領シ、尾張藩
ニ屬セリ、其後、木曾ハ、尾張公ノ領トナリ、山村氏、舊ノ如ク之ヲ預リ、且幕府ノ
命ヲ以テ、福島ノ關ヲ守レリ、
山村氏ハ、尾張公ニ屬スルカ故ニ、倍臣タルカ如キモ、子息タル者ハ、一人必ス、
旗下ニ列シテ、江戸へ參勤セリ、

信濃歷史談附錄

水琴堂藏版

信濃歷史談附錄 終

明治二十七年四月二十日印刷
明治二十七年四月廿六日發行

定價二十五錢

編纂者

長野縣南安曇郡豊科村五百二番地
太田 鶴雄

發行者

長野縣筑摩郡松本町百九十七番地
小松 爲吉

印刷者

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目廿三番地
根岸 高光

發行所

長野縣筑摩郡松本町百九十七番地
水琴堂

印刷所

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目拾貳番地
株式會社 秀英舎第一工場

版權
所有

